岐阜県文化財保護センター
調査報告書　第143集

洞　第　2　古　墳　群

2020
岐阜県文化財保護センター

洞（ほら）第（だい）２古墳群

２０２０

岐阜県文化財保護センター

平成 27 年度発掘区遠景（西から）

平成 28 年度発掘区遠景（南東から）

洞北山４号古墳出土遺物

序

岐阜市は、岐阜県の中央南部、濃尾平野の北端に位置しています。市内には、長良川が貫流し、金華山がそびえたつ、緑豊かな地域です。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道建設に伴い、建設予定地にかかる洞第２古墳群の発掘調査を平成 27・28 年度に実施しました。洞第２古墳群は、御望山南麓に洞第１古墳群とあわせて 17 基の古墳の所在が知られていましたが、これまで詳細な発掘調査は行われていませんでした。

今回の発掘調査では、古墳時代中期から後期にかけて築造された古墳を新たに発見し、県内では出土事例の少ない提瓶を確認したほか、古墳群の変遷を辿ることができました。また、縄文時代早期、古墳時代前期、古代、中世の遺構も確認し、当該地が縄文時代早期から中世まで、断続的に土地利用されていたことが分かりました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係機関並びに関係者各位、岐阜市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和２年２月

岐阜県文化財保護センター
所長　小林　法良

例　言

1　本書は、岐阜県岐阜市洞に所在する洞第２古墳群（岐阜県遺跡番号 21201-02782）の発掘調査報告書である。

2　本調査は、東海環状自動車道建設に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘調査及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。

3　宇野隆夫帝塚山大学教授の指導のもとに、発掘調査は平成 27・28 年度に実施した。整理等作業は平成 29・30 年度に実施した。

4　発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第１章第２節に一括掲載した。

5　本書の執筆及び編集は杉山忠弘が行った。ただし、第１章第１節及び第２節の一部と、第３章第３節の３号古墳から７号古墳及び 10 号古墳から 12 号古墳については長谷川幸志の所見をもとに杉山が執筆を行った。

6　発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、株式会社イビソク（平成 27～29 年度）、国際文化財株式会社中部支店（平成 30 年度）に委託して行った。

7　遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。

8　放射性炭素年代測定（AMS 法）は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第４章に掲載した。第４章第１節は杉山が執筆した。

9　発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
井川祥子、田中弘志、徳田誠志、藤澤良祐、森島一貴、横幕大祐、渡邉博人、岐阜市教育委員会、岐阜市歴史博物館

10　本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。

11　土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。

12　調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目　次

序
例言
目次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過と方法……3
第２章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境……11
　第２節　歴史的環境……12
第３章　調査の成果
　第１節　基本層序……16
　第２節　遺構・遺物の概要……20
　第３節　古墳と遺物……26
　第４節　古墳以外の遺構・遺物……110
　　遺構一覧表、遺物観察表、発掘区全域図
第４章　自然科学分析
　第１節　分析の概要……231
　第２節　ST１・ST２・ST４出土骨片及びST３・SL１出土炭化物の放射性炭素年代測定……231
第５章　総括
　第１節　土地利用の変遷について……236
　第２節　洞第２古墳群の変遷について……241
　第３節　５号古墳について……249
引用・参考文献……255
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　洞第２古墳群位置図 ･････････････････････ 1
第２図　試掘坑と発掘調査区の位置　･････････････ 2
第３図　地区割り図 ･････････････････････････････ 4
第４図　洞第２古墳群周辺地形図 ････････････････ 11
第５図　周辺遺跡位置図 ････････････････････････ 14
第６図　基本層序模式図（１）･････････････････ 17
第７図　基本層序模式図（２）･････････････････ 18
第８図　下層確認トレンチ土層断面 ･･････････････ 19
第９図　濃州方県郡洞村絵図（宝暦４年）･････････ 19
第 10 図　石室壁体の名称 ･･････････････････････ 21
第 11 図　石材各面の名称 ･･････････････････････ 21
第 12 図　土坑等分類模式図 ････････････････････ 22
第 13 図　洞北山３号古墳平面図・周溝土層断面図（１）
･･･ 27
第 14 図　洞北山３号古墳平面図・周溝土層断面図（２）
･･･ 28
第 15 図　洞北山４号古墳平面図 ･････････････････ 29
第 16 図　４号古墳墳丘･石室掘方･石室埋土土層断面図（１）
･･･ 30
第 17 図　４号古墳墳丘･石室掘方･石室埋土土層断面図（２）
･･･ 31
第 18 図　４号古墳墳丘･石室掘方･石室埋土土層断面図（３）
･･･ 32
第 19 図　４号古墳周溝土層断面図 ･･････････････ 33
第 20 図　４号古墳外護列石検出状況 ････････････ 34
第 21 図　４号古墳石室平面図 ･･････････････････ 36
第 22 図　４号古墳石室展開図 ･･････････････････ 37
第 23 図　４号古墳石室掘方完掘状況・玄室袖部立柱石断面
図 ･･････････････････････････････････････ 38
第 24 図　４号古墳石室断面図・閉塞石及び梱石下検出状況
･･･ 40
第 25 図　４号古墳小石槨検出状況 ･･････････････ 41
第 26 図　４号古墳石室内遺物出土状況 ･･････････ 43
第 27 図　４号古墳奥壁付近遺物出土状況 ････････ 44
第 28 図　４号古墳出土遺物（１）･････････････ 48
第 29 図　４号古墳出土遺物（２）･････････････ 49
第 30 図　４号古墳出土遺物（３）･････････････ 50
第 31 図　４号古墳出土遺物（４）･････････････ 51
第 32 図　４号古墳出土遺物（５）･････････････ 52
第 33 図　４号古墳出土遺物（６）･････････････ 53
第 34 図　洞北山５号古墳平面図･墳丘･周溝土層断面図（１）
･･･ 55
第 35 図　洞北山５号古墳平面図･墳丘･周溝土層断面図（２）
･･･ 56
第 36 図　洞北山５号古墳平面図･墳丘･周溝土層断面図（３）
･･･ 57
第 37 図　５号古墳葺石検出状況 ････････････････ 58
第 38 図　５号古墳墳丘下造成状況 ･･････････････ 59
第 39 図　５号古墳木棺痕跡及び埋納遺構平面図・土層断面
図・埋納遺構遺物出土状況 ･･････････････････ 61
第 40 図　５号古墳墓坑埋土土層断面図・完掘状況 ････ 62
第 41 図　５号古墳出土遺物 ････････････････････ 64
第 42 図　洞北山６号古墳平面図・墳丘・石室掘方土層断面
図（１）･････････････････････････････････ 66
第 43 図　洞北山６号古墳平面図・墳丘・石室掘方土層断面
図（２）･････････････････････････････････ 67
第 44 図　６号古墳周溝土層断面図 ･･････････････ 68
第 45 図　６号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図（１）
･･･ 70
第 46 図　６号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図（２）
･･･ 71
第 47 図　６号古墳石室展開図・断面図 ･･････････ 72
第 48 図　６号古墳石室掘方完掘状況・石室内遺物出土状況
･･･ 73
第 49 図　６号古墳出土遺物（１）･････････････ 75
第 50 図　６号古墳出土遺物（２）･････････････ 76
第 51 図　洞北山７号古墳平面図 ････････････････ 78
第 52 図　７号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図（１）
･･･ 79
第 53 図　７号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図（２）
･･･ 80
第 54 図　７号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図 ･･ 81
第 55 図　７号古墳石室展開図・石室内遺物出土状況 ･･ 82
第 56 図　７号古墳礫床下床面検出状況・完掘状況 ････ 83
第 57 図　７号古墳出土遺物 ････････････････････ 84
第 58 図　洞北山８号古墳平面図・外護列石検出状況 ･･ 86
第 59 図　８号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図 ･･ 87
第 60 図　８号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図・完掘
状況 ･･････････････････････････････････ 89
第 61 図　８号古墳石室展開図・石室内遺物出土状況 ･･･ 90
第 62 図　８号古墳出土遺物 ････････････････････ 92
第 63 図　洞北山９号古墳平面図・外護列石検出状況 ･･ 93
第 64 図　９号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図（１）
･･･ 94
第 65 図　９号古墳墳丘・石室掘方・周溝土層断面図（２）
･･･ 95

第 66 図　９号古墳石室平面図・石室埋土土層断面図 ‥ 97
第 67 図　９号古墳石室展開図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 98
第 68 図　９号古墳玄室硬化面下の礫検出状況・整地土検出状況・完掘状況 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 99
第 69 図　９号古墳出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 102
第 70 図　洞北山 10 号古墳平面図・石室掘方・石室埋土土層断面図・完掘状況 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 103
第 71 図　10 号古墳石室展開図‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 104
第 72 図　洞北山 11 号古墳平面図・石室掘方・石室埋土土層断面図・完掘状況・石室展開図‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 106
第 73 図　洞北山 12 号古墳平面図・石室掘方・石室埋土土層断面図・完掘状況・石室展開図‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 107
第 74 図　SL１・SL２・SL３・SL４遺構図（１） ‥‥‥ 111
第 75 図　SL１・SL２・SL３・SL４遺構図（２） ‥‥‥ 112
第 76 図　SI１遺構図（１） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 114
第 77 図　SI１遺構図（２） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 115
第 78 図　SI１遺構図（３） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 116
第 79 図　SI１出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 117
第 80 図　SS１遺構図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 118
第 81 図　SS１出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 119
第 82 図　SF１遺構図（１） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 121
第 83 図　SF１遺構図（２） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 122
第 84 図　SF１遺構図（３） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 123
第 85 図　SF１出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 124
第 86 図　ST１遺構図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 126
第 87 図　ST２遺構図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 127
第 88 図　ST３遺構図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 129
第 89 図　ST４遺構図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 130
第 90 図　ST２・３・４出土遺物（１） ‥‥‥‥‥‥‥ 132
第 91 図　ST２・３・４出土遺物（２） ‥‥‥‥‥‥‥ 133
第 92 図　SD１・SD２遺構図（１） ‥‥‥‥‥‥‥‥ 135
第 93 図　SD１・SD２遺構図（２） ‥‥‥‥‥‥‥‥ 136
第 94 図　SD３・SD４遺構図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 137
第 95 図　SD８遺構図（１） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 140
第 96 図　SD８遺構図（２） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 141
第 97 図　SD12 遺構図（１）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 142
第 98 図　SD４・８出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 143
第 99 図　SM１遺構図（１） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 144
第 100 図　SM１遺構図（２） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 145
第 101 図　SM１遺構図（３） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 146
第 102 図　SM２遺構図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 148
第 103 図　SM３遺構図（１） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 150
第 104 図　SM３遺構図（２） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 151
第 105 図　SM１・２出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 152
第 106 図　SK51・SK79・SK93・SK95 遺構図‥‥‥‥‥ 153
第 107 図　SK93・SK95 出土遺物‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 153
第 108 図　試掘坑・撹乱坑・遺物包含層・表土層出土遺物（１） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 155
第 109 図　試掘坑・撹乱坑・遺物包含層・表土層出土遺物（２） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 156
第 110 図　試掘坑・撹乱坑・遺物包含層・表土層出土遺物（３） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 157
第 111 図　発掘区全域図割付図 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 173
第 112 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（１） ‥ 174
第 113 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（２） ‥ 175
第 114 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（３） ‥‥176
第 115 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（４） ‥‥177
第 116 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（５） ‥‥178
第 117 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（６） ‥‥179
第 118 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（７） ‥‥180
第 119 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（８） ‥‥181
第 120 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（９） ‥‥182
第 121 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（10） ‥‥183
第 122 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（11） ‥‥184
第 123 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（12） ‥‥185
第 124 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（13） ‥‥186
第 125 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（14） ‥‥187
第 126 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（15） ‥‥188
第 127 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（16） ‥ 189
第 128 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（17） ‥ 190
第 129 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（18） ‥ 191
第 130 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（19） ‥ 192
第 131 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（20） ‥ 193
第 132 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（21） ‥ 194
第 133 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（22） ‥ 195
第 134 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（23） ‥‥196
第 135 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（24） ‥‥197
第 136 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（25） ‥‥198
第 137 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（26） ‥‥199
第 138 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（27） ‥‥200
第 139 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（28） ‥‥201
第 140 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（29） ‥‥202
第 141 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（30） ‥‥203
第 142 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（31） ‥‥204
第 143 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（32） ‥‥205
第 144 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（33） ‥‥206
第 145 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（34） ‥‥207
第 146 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（35） ‥‥208
第 147 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（36） ‥ 209
第 148 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（37） ‥ 210

第 149 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（38）‥ 211
第 150 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（39）‥‥212
第 151 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（40）‥‥213
第 152 図　発掘区全域図分割図　古墳検出面（41）‥‥214
第 153 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（１）‥215
第 154 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（２）‥216
第 155 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（３）‥217
第 156 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（４）‥218
第 157 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（５）‥219
第 158 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（６）‥220
第 159 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（７）‥221
第 160 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（８）‥222
第 161 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（９）‥223
第 162 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（10）‥224
第 163 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（11）‥225
第 164 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（12）‥226
第 165 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（13）‥227
第 166 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（14）‥228
第 167 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（15）‥229
第 168 図　発掘区全域図分割図　墳丘下調査面（16）‥230
第 169 図　暦年較正結果‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥234
第 170 図　土地利用変遷図‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥237
第 171 図　発掘区周辺の空中写真‥‥‥‥‥‥‥‥‥239
第 172 図　対象古墳群位置図‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥244
第 173 図　洞第２古墳群古墳変遷図‥‥‥‥‥‥‥‥245
第 174 図　上城田寺古墳群第４支群‥‥‥‥‥‥‥‥245
第 175 図　船来山古墳群　M支群‥‥‥‥‥‥‥‥‥246
第 176 図　カイト古墳群‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥246
第 177 図　県内出土の有孔砥石‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥252

表目次

表１　周辺の遺跡一覧表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 15
表２　古墳以外の遺構検出数‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 21
表３　出土遺物一覧表（遺物包含層を含む）‥‥‥‥‥‥ 23
表４　土器類出土点数‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 23
表５　遺構一覧表（古墳）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 159
表６　遺構一覧表（焼礫集積土坑・炉跡）‥‥‥‥‥‥‥ 159
表７　遺構一覧表（竪穴建物）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 159
表８　遺構一覧表（竪穴建物付属遺構）‥‥‥‥‥‥‥‥ 159
表９　遺構一覧表（配石遺構）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 159
表 10　遺構一覧表（道路状遺構に伴う硬化面）‥‥‥‥‥ 160
表 11　遺構一覧表（火葬施設）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 160
表 12　遺構一覧表（溝）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 160
表 13　遺構一覧表（平場）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 160
表 14　遺構一覧表（土坑）（１）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 161
表 15　遺構一覧表（土坑）（２）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 162
表 16　土器観察表（１）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 163
表 17　土器観察表（２）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 164
表 18　土器観察表（３）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥165
表 19　土器観察表（４）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥166
表 20　土器観察表（５）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥167
表 21　土器観察表（６）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥168
表 22　土器観察表（７）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥169
表 23　土器観察表（８）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥170
表 24　金属製品一覧表（剣・刀・鏃・刀子類）（１）‥‥‥170
表 25　金属製品一覧表（剣・刀・鏃・刀子類）（２）‥‥‥171
表 26　金属製品一覧表（その他）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥171
表 27　金属製品一覧表（釘）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥172
表 28　石器・石製品一覧表‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥172
表 29　測定試料及び処理‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥232
表 30　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果‥‥‥‥‥233
表 31　洞第２古墳群及び近隣の古墳一覧‥‥‥‥‥‥‥‥243
表 32　美濃地方における木棺直葬を埋葬施設とする古墳一覧
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥251
表 33　遊塚古墳埋納施設出土遺物一覧‥‥‥‥‥‥‥‥‥251

巻頭図版目次

巻頭図版

図版１　平成 27 年度発掘区遠景
平成 28 年度発掘区遠景
図版２　洞北山４号古墳出土遺物

挿入写真目次

写真１　調査着手前…… 10
写真２　表土掘削作業風景…… 10
写真３　遺物包含層掘削作業風景…… 10
写真４　石室内掘削作業風景…… 10
写真５　石室内礫撤去作業風景…… 10
写真６　SD８掘削作業風景…… 10
写真７　遺構実測作業風景…… 10
写真８　現地見学会の様子…… 10
写真９　ラジコンヘリ景観写真撮影…… 10
写真 10　墳丘内列石 …… 35
写真 11　礫床北東隅の状況…… 39
写真 12　梱石と側壁の状況…… 39
写真 13　裏込め土の状況…… 100
写真 14　発掘区東側の一村総持のため池…… 125

写真図版目次

図版１　古墳群遠景
図版２　３号古墳
図版３　４号古墳（1）
図版４　４号古墳（2）
図版５　５号古墳（1）
図版６　５号古墳（2）
図版７　６号古墳（1）
図版８　６号古墳（2）・７号古墳（1）
図版９　７号古墳（2）・８号古墳（1）
図版 10　８号古墳（2）・９号古墳（1）
図版 11　９号古墳（2）・10 号古墳
図版 12　11 号古墳・12 号古墳
図版 13　SL１・２・SS１
図版 14　SI１
図版 15　SF１・SM２
図版 16　ST１・２・４
図版 17　SD１・２・３
図版 18　SD４・８・12
図版 19　SM１・３
図版 20　出土遺物（1）
図版 21　出土遺物（2）
図版 22　出土遺物（3）
図版 23　出土遺物（4）
図版 24　出土遺物（5）
図版 25　出土遺物（6）
図版 26　出土遺物（7）
図版 27　出土遺物（8）
図版 28　出土遺物（9）
図版 29　出土遺物 (10)
図版 30　出土遺物 (11)
図版 31　出土遺物 (12)

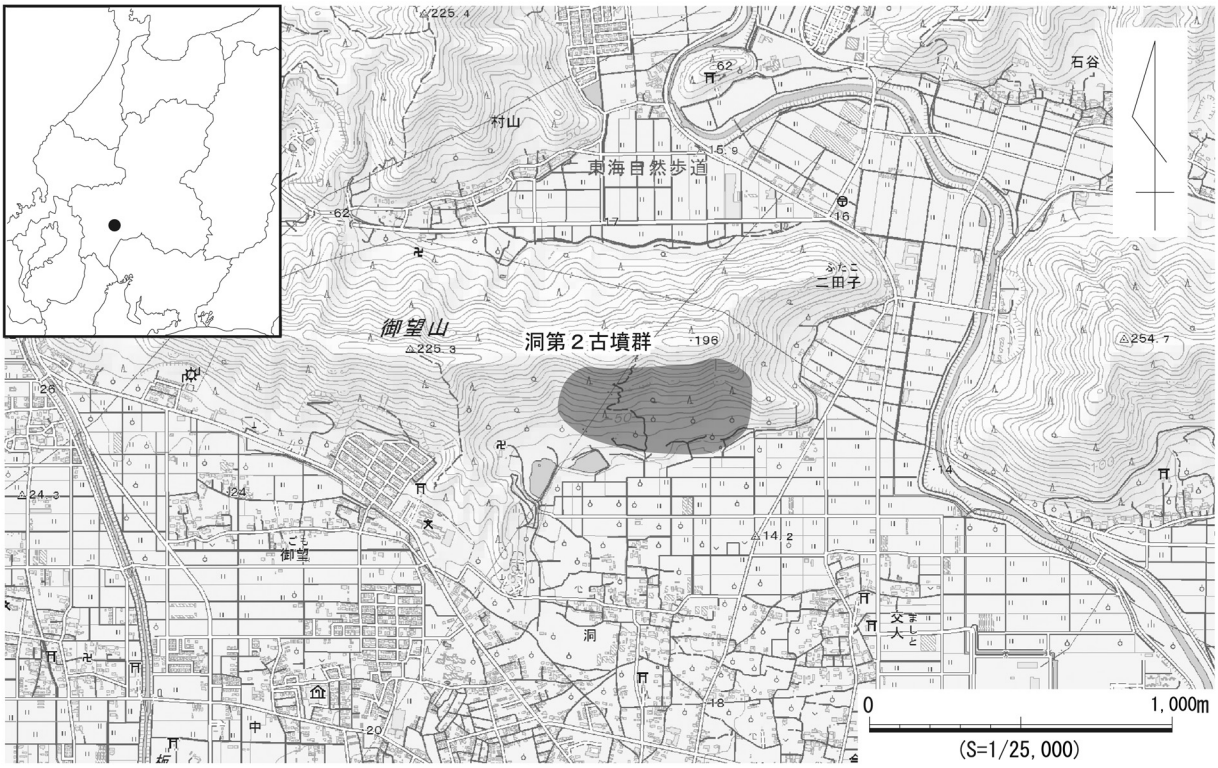
第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

洞第２古墳群は、岐阜市洞地内に所在する（第１図）。

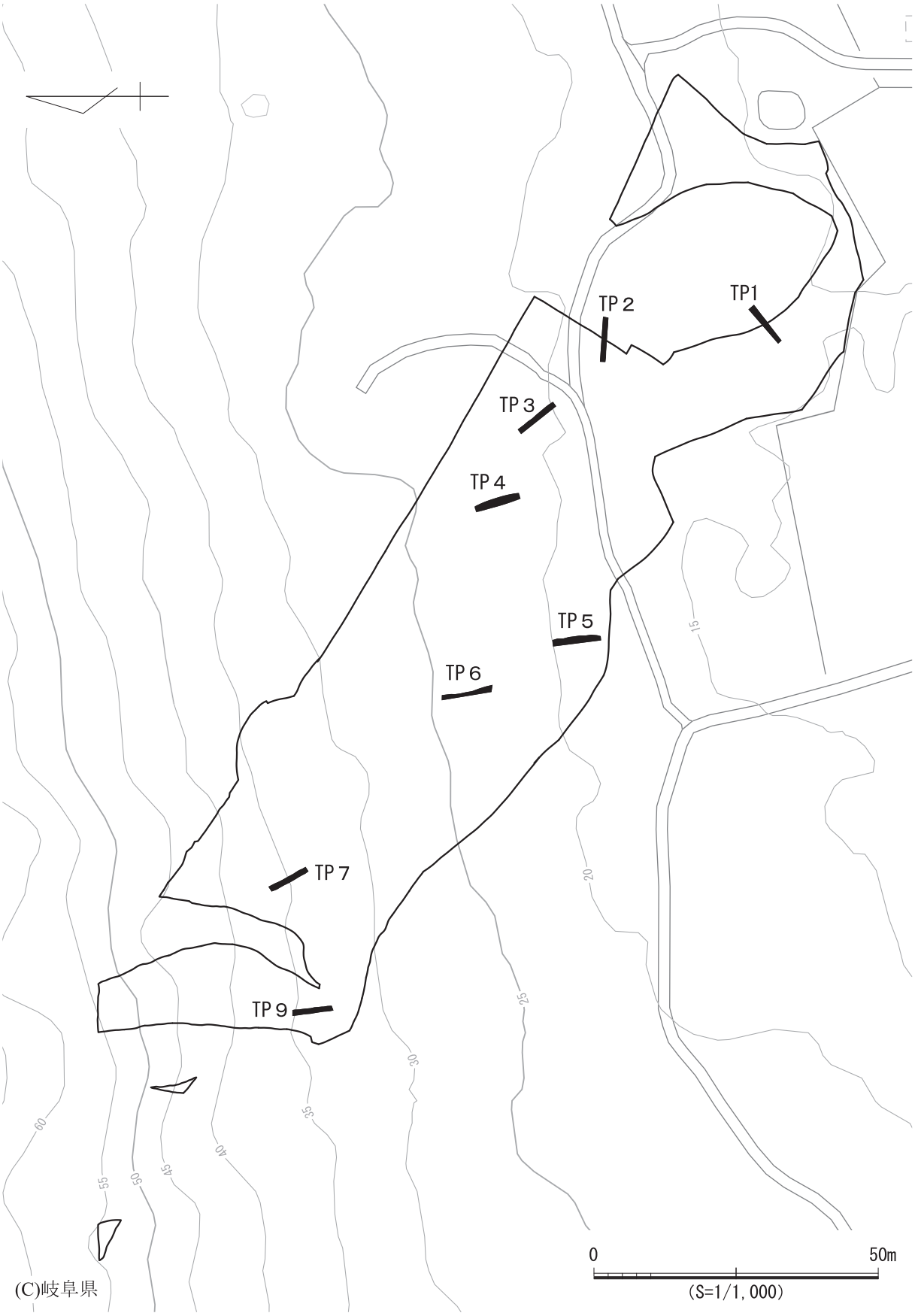
濃尾平野の縁辺部に当たる美濃山地の斜面には、古くから多くの古墳群が立地しており、洞第２古墳群もこうした古墳群の一つである（第２章第２節）。洞第２古墳群の存在は古くから知られており、岐阜県史跡調査委員小川栄一氏による昭和６年の報告にも紹介されている[1)]。洞地区の御望山南麓には 17 基の古墳が分布し、洞第１古墳群（８基）、洞第２古墳群（９基）に分かれる（岐阜市 1978）。

洞第２古墳群及びその周辺において、東海環状自動車道の建設が計画された。本巣市の糸貫ＩＣから岐阜市の岐阜ＩＣまでの区間においては、岐阜市北西部の山地をトンネル（御望山トンネル）で抜け、洞第２古墳群の所在する御望山東部の南斜面にトンネルの坑口を建設する計画である。この事業に伴う洞第２古墳群の試掘・確認調査は、平成 26 年度に国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所（以下、「岐阜国道事務所」という。）から、岐阜県教育委員会に依頼された。用地内には周知の洞北山２号古墳及び洞北山３号古墳（以下、それぞれ「２号古墳」「３号古墳」という。）が存在していたことから、これらの範囲確認と、斜面上方からの流土に埋もれている古墳の有無確認を目的に８箇所の試掘調査坑を設定した（第２図、なお TP８は欠番）。TP１では２号古墳の周溝、TP２では３号古墳の墳丘及び周溝をそれぞれ確認した。



第１図　洞第２古墳群位置図（S=1/25,000）

（国土地理院電子地形図 25000「北方」平成 28 年調整を元に作成）



第２図　試掘坑と発掘調査区の位置

TP３・４では表土から２m以上掘削したが旧表土に達せず、後にこの部分には天正地震を含む近世以降の崩積性堆積土（第３章第１節参照）が厚く堆積した谷状地形（以下、「旧谷地形」という。）が存在していたことが明らかとなった。TP５では土師器片を含む遺物包含層と硬化した面が東西方向に延びる痕跡を確認した。この遺構は調査坑の位置から道路状遺構の一部と考えられる。TP６では周溝と考えられる溝（洞北山６号古墳周溝）と墳丘（洞北山６号古墳（以下、「６号古墳」という。））を確認した。TP７では一辺約0.4mのチャート角礫十数個がまとまって検出された。TP９では遺構・遺物は確認できなかった。

以上の結果をもとに、平成 26 年８月 28 日に岐阜県教育委員会社会教育文化課は岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、6,600 ㎡について本発掘調査が必要との意見をまとめた。その後の詳細設計の変更により、対象面積は6,640 ㎡となった。

本工事については、文化財保護法第 94 条第１項の規定に基づき、岐阜国道事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下、「県教育長」という。）あて埋蔵文化財発掘通知（平成 27 年３月 31 日付け国部整岐調第 273 号）が提出され、同条第４項の規定に基づき、県教育長から同事務所長あて発掘調査実施勧告（平成 27 年４月９日付け社文第 54 号の 18、平成 28 年３月 31 日付け社文第 54 号の 214）を通知した。本発掘調査は、東海環状自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業として、岐阜国道事務所から岐阜県教育委員会に依頼され、平成 27 年度に 4,453 ㎡、平成 28 年度に 2,187 ㎡を対象に、岐阜県文化財保護センター（以下、「センター」という。）が実施した。センターは調査着手後、発掘調査の報告（平成 27 年５月 25 日付け文財セ第 88 号・平成 28 年６月２日付け文財セ第 109 号）を県教育長に提出した。

注

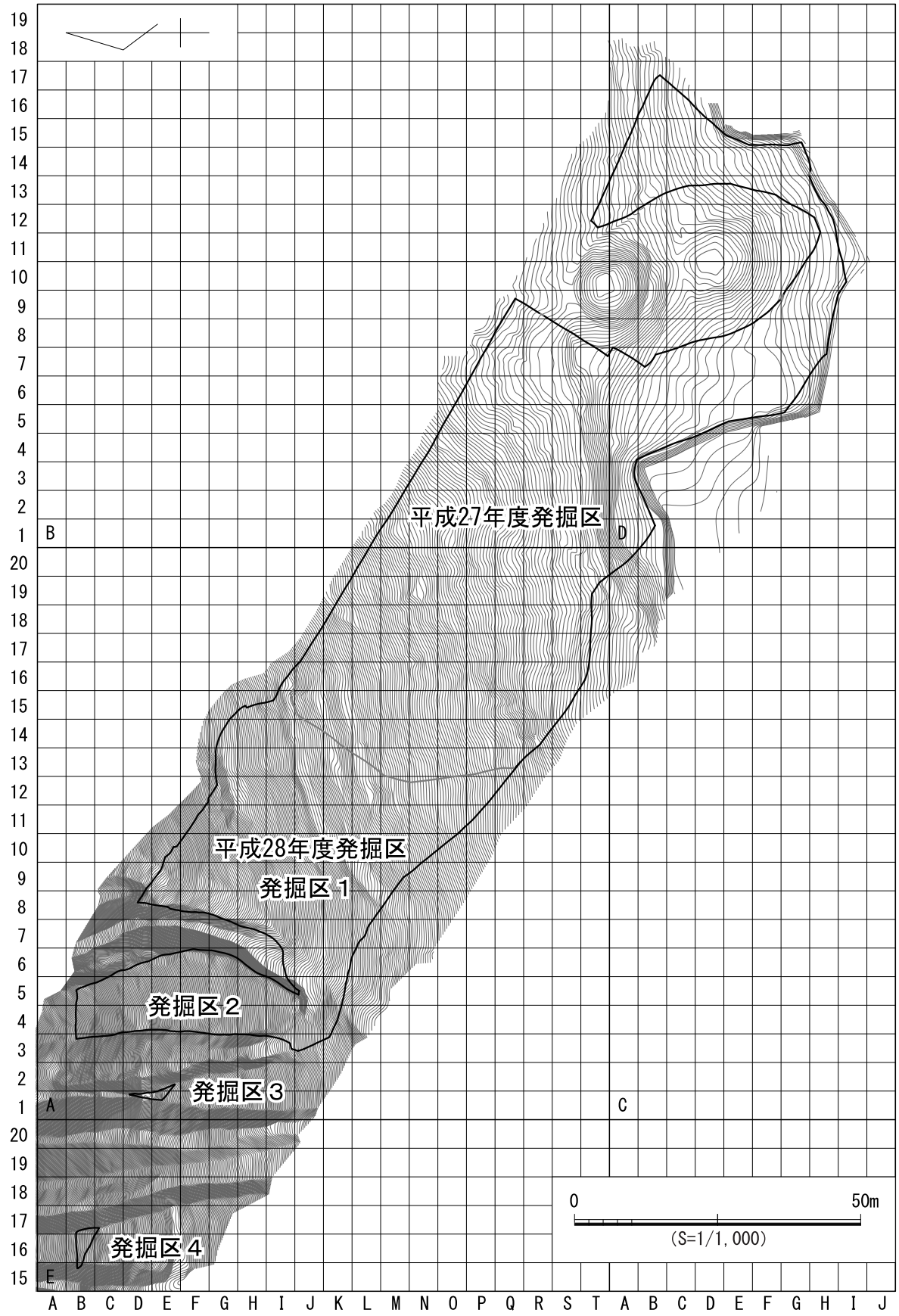
１）小川栄一氏は洞北山を実地調査して、直径七間・高さ六尺の円墳と、直径六間・高さ四尺の円墳が接続した前円後円墳の存在を記録している（小川 1931）。洞北山２号古墳と同３号古墳にあたると思われる。

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

調査グリッドは、世界測地系の座標に基づく一辺５mの区画により設定し、X=-57,890、Y=-40,440 を原点として割り付けた（第３図）。発掘区が広範なため、一辺 100m（大グリッド、Ａ～Ｅ）で分割した。さらにその中を一辺５m（小グリッド）で分割し、南北軸は北からＡ～Ｔ、東西軸は西から１～20 の名称を設定した。グリッドの名称は、大グリッド＋小グリッドで表示し、例えば原点を含むグリッドは「AA1」となる。

発掘作業では、まず重機でⅠ層（表土及び崩積性堆積土）及び堆積状況などから一部のⅡ層（造成土など）を掘削した。平成 27 年度の調査では、予想される古墳の位置や、資機材・排土の搬出路を確保するため、発掘区西の斜面上方から順に調査を実施することとし、表土掘削は５期に分けて実施した。調査に伴って発生する排土は、農道を挟んで南側の建設用地内に仮置きし、現場作業終了後に発掘区内に運搬して埋め戻した。平成 28 年度の調査では、便宜上発掘区中ほどに位置する現況の谷地形（以下、「現谷地形」という。）の東側を発掘区１、西側を発掘区２、面積の狭い飛び地２か所を東から発掘区３、発掘区４とした。表土が薄く重機掘削では遺構を損なう可能性があった発掘区２のAB３～AD６グリッドと、発掘



第３図　地区割り図

区３・４については、人力で表土掘削を実施した。重機による表土掘削は発掘区１の斜面上方から行い、４期に分けて実施した。調査に伴って発生する排土は、発掘区に隣接する建設用地内と農道を挟んで南側の建設用地内に仮置きし、現場作業終了後に発掘区内に運搬して埋め戻した。

遺物包含層掘削及び遺構検出は、古墳時代以降の堆積土であるⅡ層を掘り下げて行った。平成 27 年度の調査では、旧谷地形を挟んだ発掘区西部において、Ⅱ層と古墳時代の旧表土（Ⅲ層（黒褐色土））との区別が困難な範囲や、旧表土に弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が含まれる箇所については、旧表土を除去して遺構検出を行った。また、古墳については墳丘盛土除去後にその下面でも遺構検出を行った。平成 28 年度の調査では、発掘区２・３・４でⅡ層を確認できなかったため、Ⅰ層基底面で遺構検出を行った。

遺構掘削は土層の記録や観察を行ったのち、埋土をすべて除去して行った。なお、平成 27 年度の調査では、大型の溝（SD３・SD８）の埋土上層がⅠ層によって埋没していたため、検出前に重機によりⅠ層を除去した。平成 28 年度の調査では、洞北山８号古墳（以下、「８号古墳」という。）の墳丘北側の周溝内に集積していた礫について、人力掘削が困難なため重機で掘削を行った。また、自然流路（NR１・NR２、現谷地形含む）の上層はⅠ層によって埋没していたため、検出後に重機で埋土の一部を掘削した。古墳については、墳丘盛土除去後に石室掘方及び墳丘下の遺構についても掘削した。

遺構実測は手測りとデジタル測量により行った。ただし、石室等の検出状況については写真測量やレーザー測量を併用した。

遺構や遺物出土状況等の記録写真は、一眼レフ 35 ㎜カメラ（リバーサル、モノクロ）、中判カメラ（リバーサル、モノクロ）で撮影した。遺跡景観写真はラジオコントロールヘリコプターで撮影した。遺物は、ほぼ全点を原位置で測量し出土地点を記録した。

２　調査の経過

現地での調査経過は、以下のとおりである。

平成 27 年度　発掘作業面積 4,453 ㎡

第１・２週（５／20～30）　調査前に第１期の表土掘削範囲について現況地形測量を実施し、バックホウにより第１期の表土掘削作業を実施した。

第３週（５／31～６／６）　人力掘削を開始した。発掘区の壁面精査等により古墳や石室と考えられる遺構を数基確認した。また、洞北山７号古墳(以下、「７号古墳」という。)の石室の検出を完了した。

第４週（６／７～13）　第２期の表土掘削を開始し、洞北山５号古墳及び洞北山４号古墳(以下、「５号古墳」「４号古墳」という。)の墳丘を確認した。７号古墳南側で検出面としていたⅢ層（旧表土）上面での遺構判別が困難であったため、等高線に直行する方向で土層確認トレンチを設定し掘削した。その結果 SI１を壁面で確認したため、この遺構の形状がはっきりと確認できる面（Ⅲ層漸移層上面）まで全体的に掘削することにした。７号古墳の石室の掘削を開始し、礫床を確認した。

第５週（６／14～20）　表土掘削作業を継続した。東西方向の大溝 SD３を確認した。７号古墳の石室内の掘削を完了し、全景写真を撮影した。７号古墳の周溝上面から小規模な竪穴状の石室（洞北山 12 号古墳（以下、「12 号古墳」という。））を検出した。

第６週（６／21～27）　SI１の検出及び、その南側の造成段に堆積していた流土の除去を完了した。洞北山 11 号古墳（以下、「11 号古墳」という。）を検出した。12 号古墳の石室内の堆積の除去を終え、SI１及び 11 号古墳の石室内の掘削を開始した。

第７～９週（６／28～７／18）　第２期の表土掘削を完了した。６号古墳を覆うように造成段の盛土が存在していることが判明し、人力でこれを掘削した。11 号古墳の埋土の除去を完了した。SI１の床面精査を実施して柱穴等を確認し、全景写真を撮影した。また、６号古墳周辺の遺構検出を完了した。

第 10 週（７／19～25）　６号古墳の石室及び周溝の掘削を開始した。また、大溝 SD８の南半分について掘削を行った。

第 11 週（７／26～８／１）　６号古墳の石室の掘削過程で、内部に大型の礫が多数落ち込んでいる状況を確認した。火葬施設 ST４を検出した。６号古墳の石室の奥壁に接する部分から、原位置を保っていると考えられる土師器（甕）と須恵器（平瓶）が出土した。なお、６号古墳以南に堆積する黒色の旧表土中には弥生～古墳時代初頭の遺物が含まれていたため、その下層の漸移層まで掘削して検出を行った。

第 12 週（８／２～８）　クレーン車を用いて６号古墳の石室内の大型礫の除去を実施し、掘削を継続した。除去した礫の下層から鉄刀や耳環が出土した。ST４から棺台と考えられる６個の被熱礫を検出した。

第 13 週（８／９～15）　夏季作業休止期間

第 14 週（８／16～22）　第２期の表土掘削範囲の調査を開始した。宇野隆夫氏（帝塚山大学教授）の指導を得た。５号古墳の頂部から鉄剣などが出土し、横穴式石室を持つ古墳ではないことが判明した。

第 15 週（８／23～29）　ST４からは焼土の掘り下げに伴い多量の骨片が出土した。また、５号古墳墳頂部の埋葬施設を確認するが、この段階では判然としなかった。SI１の掘方の完掘を完了した。６号古墳の石室内部の掘削を完了し、写真撮影を行った。石室の玄門にあたる部分には抜き取り痕があり、ビニールなどが混じる土もみられることから、石材が比較的最近抜き取られたことが判明した。５号古墳周辺の検出写真を撮影した。この時点では墳丘裾の直線的な石列（葺石）について中世の溝である可能性も考えていた。

第 16 週（８／30～９／５）　４号古墳周囲の遺物包含層掘削を進める過程で、石室や外護列石の遺存状態が非常に良いことが判明した。また、12 号古墳の石室を解体した。インターンシップにより岐阜女子大生１名の受け入れを行った。５号古墳の埋納遺構から提砥と鹿角装の刀子などが出土した。

第 17 週（９／６～12）　４号古墳の石室や周溝の掘削を開始した。

第 18 週（９／13～19）　田中弘志氏（関市教育委員会）の指導を得た。資材搬出のために残していた表土の掘削（第３期）を実施した。遺物包含層掘削を進め、発掘区中央の谷奥部に火葬施設群が存在することを確認した。

第 19 週（９／20～26）　第３期の表土掘削範囲について、遺物包含層掘削と遺構検出を進めた。地元説明会及び現地見学会を開催し、合計 197 名の参加者を得た。

第 20 週（９／27～10／３）　遺物包含層掘削と遺構検出を継続した。４号古墳の周溝に接した位置から小型の石室（洞北山 10 号古墳（以下「10 号古墳」という。））を検出した。また、４号古墳南側に造成段や溝群を確認した。遺構掘削は、古墳関係の遺構や火葬施設を中心に実施した。４号古墳は、石室内の原位置を留めていない石材等を実測後にクレーン車を使って除去し、石室内の掘削を開始した。

第 21 週（10／４～10）　第４期の表土掘削を開始し、併行して遺物包含層掘削や遺構検出作業を進めた。この結果、AT20～DA２グリッド付近は谷地形になっており、厚く黒色土が堆積している状況を確認した。３号古墳の周溝の掘削を開始した。

第 22 週（10／11～17）　５号古墳の墳頂部の再検出を行い、南側葺石列と平行する方位で新たに木棺痕

跡を確認した。副葬品が出土した埋納遺構とは方位が異なっており、その位置付けについて検討が必要となった。第４期の表土掘削を完了し、遺物包含層掘削や遺構検出を進めた。その結果、３号古墳東側から、周溝の続きや焼礫を伴う遺構 SL１などを検出した。４号古墳の石室は掘削過程で片袖式の構造が明確となった。羨道や玄室の埋土中から遺存状態の良い遺物が出土し、特に奥壁付近（後に小石槨内であったことが判明）では埋納された状況で須恵器（平瓶、短頸壺）が出土した。また、奥壁部分を掘り下げたところ、礫床や鉄鏃、鉄剣などが出土し、床面を２面確認した。葺石や外護列石の実測のため、空中写真撮影を行った。

第 23 週（10／18～24）　２・３号古墳東側の遺物包含層掘削や遺構検出を継続し、砂礫層（自然流路）が基盤になっている状況を確認した。クレーン車を使用して４号古墳の石室内に落ち込んでいた天井石と思われる大型石材などを除去し、掘削を進めた。第５期の表土掘削を実施した。発掘区南側の発掘区境付近は、農業用用水路の掘削などにより、撹乱を受けている状況を確認した。横幕大祐氏（池田町教育委員会）の指導を受けた。

第 24 週（10／25～31）　５期の表土掘削範囲について遺物包含層掘削や遺構検出を進めたが、溝 SD２を除き目立った遺構や遺物はみられなかった。すべての遺物包含層掘削及び遺構検出を終えた。４号古墳の石室第１床面の小石槨の解体作業を実施し、須恵器（平瓶、短頸壺）が礫床上面に立てられていたと推定される須恵器（高坏）の上に載せられていたことが判明した。

第 25 週（11／１～７）　出土遺物に関して渡邉博人氏（各務原市役所）の指導を受けた。４号古墳の石室は礫床上面まで掘削を進めた。発掘区全体の清掃作業を行い、ラジオコントロールヘリコプターによる景観写真撮影を実施した。

第 26 週（11／８～14）　11 号古墳の解体作業を開始した。５号古墳の墳頂部の断ち割りを実施し、黒色土や黄褐色砂礫が水平に堆積している状況を確認した。また、４号古墳の石室の実測補助を目的にレーザー測量を行った。

第 27 週（11／15～21）　徳田誠志氏（宮内庁書陵部）の指導を受けた。墳丘の残る古墳の解体を本格的に開始した。７号古墳や６号古墳の墳丘盛土を除去した上で遺構検出を実施し、石室の掘方等を確認した。５号古墳（墳丘）の断ち割り作業を実施し、墓坑が構築墓坑であったことを確認した。バックホウにより５号古墳の墳丘盛土を除去し、基盤の造成の状況を確認した。

第 28 週（11／22～28）　６号古墳の石室掘方の掘削作業を完了した。４号古墳（墳丘）の解体はバックホウを用いて実施し、土層確認や石室掘方の検出を併行して作業を進め、４号古墳の石室基底石までの掘削を完了した。

第 29 週（11／29～12／1）　２・３号古墳周辺の砂礫層（河道）について断ち割りを実施し、土層確認を行った。４号古墳の石室掘方の掘削を完了し、調査を終了した。

なお、12 月１日から発掘区の埋戻し作業を開始し、１月９日に完了した。遺物の一次整理作業を 12 月３日から 14 日まで行った。

平成 28 年度　発掘作業面積 2,187 ㎡

第１週（５／23～29）　調査前に発掘区の現況地形測量を実施し、借地部分を除く発掘区の設定を実施した。バックホウにより表土掘削（第１期）を開始した。

第２週（５／30～６／５）　表土掘削時に石室の一部（８号古墳）を確認した。TP７の西側に斜面に対して垂直方向に直線的に延びる溝を確認した。第１期の表土掘削を完了した（概ね発掘区１のうち、AF12～AH15 グリッド及び AI13～AJ16 グリッドと AO10～AQ13 グリッドを除く範囲）。

第３週（６／６～12）　人力掘削を開始した。８号古墳の墳丘及び石室と外護列石を確認した。

第４週（６／13～19）発掘区１の遺物包含層掘削及び遺構検出に加え、現谷地形の西側の尾根にあたる発掘区２において、北端の AB３～AB５グリッドから表土掘削及び遺物包含層掘削を開始した。この辺りは急斜面で現況が竹藪となっており、また表土が非常に薄いため遺構を損なう可能性が高く、機械での表土掘削が困難であり、人力で表土掘削及び遺物包含層掘削を実施し併せて遺構検出も行った。遺物包含層掘削時に AK６グリッドで石室の一部（洞北山９号古墳（以下、「９号古墳」という。））を確認した。

第５週（６／20～26）　発掘区１の遺物包含層掘削と遺構検出を継続した。人力で表土掘削及び遺物包含層掘削と遺構検出を行っていた発掘区２については、AD４～AD６グリッドまで完了し、AE４～AE６グリッド以南については重機による表土掘削を行うまで中断することとなった。一部掘り残していた AK６グリッドの表土掘削を完了した。８号古墳の石室の掘削を開始し羨道から須恵器（坏蓋）が出土した。また、右側壁の玄門付近では石材が消失しており、ビニール片の混じる土もみられることから、比較的新しい時代に石材が失われた可能性が高まった。富加町公民館講座受講者８名が来跡した。９号古墳の墳丘及び石室、周溝の一部を検出した。

第６～９週（６／27～７／24）発掘区１の遺物包含層掘削と遺構検出を継続した。自然流路 NR１と大溝 SD12 の重複関係を確認するため断ち割りを実施し、NR１が現況地形の谷の一部であることを確認し掘削を継続した。８号古墳の玄門付近から須恵器（坏身）が出土した。８号古墳の周溝南西部の遺構掘削を開始した。AF８～AH８グリッドの SD12 と重複する NR１の重機掘削を実施した。８号古墳の周溝南西部の掘削を完了した。NR１を完掘した。昨年度調査した７号古墳に伴う周溝の未調査部分の検出を行い、遺構掘削を開始した。また、岐阜市歴史博物館の歴博ボランティア 19 名が来跡した。重機を使って８号古墳の石室内の転石を除去した。９号古墳の石室の遺構掘削を開始した。

第 10 週（７／25～31）　発掘区２の AE４～６グリッドから AK４グリッド間の表土掘削（第２期）を実施した。９号古墳の羨道では埋土にビニール片が混じるのを確認し、撹乱されている可能性が高まった。

第 11 週（８／１～７）　飛び地である発掘区３の表土掘削（人力）及び遺物包含層掘削と遺構検出を行った。また、発掘区２の AE グリッド以南の遺物包含層掘削と遺構検出を開始した。７号古墳の周溝北西部の掘削が完了した。９号古墳の石室北東部に確認トレンチを設定し掘削を行った。

第 12～13 週（８／８～21）　発掘区２の遺物包含層掘削と遺構検出を継続した。夏季作業休止期間。９号古墳北東部の確認トレンチを拡張した。重機を使って９号古墳の石室内の転石を除去した。

第 14 週（８／22～28）　宇野隆夫氏（帝塚山大学教授）の指導を得た。８号古墳の奥壁前から原位置をとどめていると思われる須恵器（平瓶）が出土した。SD12 を完掘し、南端が発掘区外に延びること、昨年度の大溝 SD８と主軸方位がほぼ一致することを確認した。飛び地である発掘区４の表土掘削（人力）及び遺物包含層掘削を開始し、遺構検出を行った。８号古墳の石室の写真撮影を行った。

第 15 週（８／29～９／４）　借地部分の立木伐採及び重機による表土掘削（第３期）を行い、発掘区北壁で近世以降の崩積性堆積土の境を確認した。発掘区１・２の間にある現谷地形の表土掘削を行い、第３期の表土掘削を完了した。重機を使って９号古墳の石室内の転石を除去した。８号古墳の石室内の写

真測量を行った。

第 16 週（９／５～11）　９号古墳の石室の掘削を継続した。発掘区１の遺物包含層掘削と遺構検出を再開した。８号古墳の周溝北西部と北東部の検出を行い、掘削を開始した。

第 17 週（９／12～18）　発掘区２の遺物包含層掘削と遺構検出を再開した。９号古墳の石室と８号古墳の周溝の掘削を継続した。９号古墳北側の遺物包含層の掘り残した部分を再掘削したところ、東西方向に２列に並ぶ配石遺構を確認し、その間の西寄りで灰釉陶器（碗）が出土した。８号古墳の周溝北西部の掘削を完了した。また、再検出した９号古墳の周溝の掘削を開始した。

第 18 週（９／19～25）　横幕大祐氏（池田町教育委員会）の指導を得た。９号古墳の石室及び周溝の掘削を継続した。７号古墳の周溝北東部の掘削を開始した。発掘区１の遺物包含層掘削と遺構検出を行った。現地見学会を開催し、83 名が参加した。

第 19 週（９／26～10／２）　発掘区１・２の間の現谷地形の遺物包含層掘削と遺構検出を行った。８号古墳の周溝、９号古墳の石室及び周溝、７号古墳の周溝の掘削を継続した。排土搬出用に残していた発掘区１南東部の表土掘削（第４期）を実施し、全ての表土掘削を完了した。発掘区１南東部の遺物包含層掘削と遺構検出を行い、全ての遺物包含層掘削を完了した。また、９号古墳北側で確認した２列に並んだ配石遺構 SS1 を、この段階では小石室と考え、石列の間を四分割して掘削を開始した。

第 20 週（10／３～９）　８号古墳と９号古墳の周溝の掘削を継続した。重機で９号古墳の石室内の転石を除去し、石室内の掘削を完了した。一部残っていた発掘区１の未検出部分を遺構検出し、全ての遺構検出を完了した。配石遺構 SS1 が小石室ではなく、北側の石列は９号古墳の周溝埋土の上に載っているだけの可能性があり、南側の石列には掘方がみられることを確認した。

第 21 週（10／10～16）　SS１の礫を除去し、南側の石列に伴う掘方を掘削したところ、礫の下面から炭化物を大量に含む土坑を確認し、完掘した。発掘区全体の清掃作業を行い、ラジオコントロールヘリコプターによる景観写真撮影を実施した。

第 22 週（10／17～23）全体図の測量を開始した。９号古墳の周溝の掘削を再開した。９号古墳の全景写真を撮影した。

第 23 週（10／24～30）　渡邉博人氏（各務原市教育委員会）の指導を得た。また、墳丘の残る古墳の解体調査を開始した。８号古墳の墳丘盛土を重機で除去した上で遺構検出を実施し、石室掘方等を確認した。７号古墳は調査過程で墳丘盛土がほとんど残っていなかったため、そのまま遺構検出を行い、石室掘方の一部を確認した。

第 24 週（10／31～11／６）　７号古墳の石室掘方を完掘し、写真を撮影した。また、９号古墳の断ち割りを実施し、断面から石室掘方の検出を試みたが判然としなかった。８号古墳の石室掘方を完掘し、完掘写真を撮影した。重機で９号古墳の墳丘盛土を除去し遺構検出を実施し、平面で石室掘方の検出を試みたが、旧表土と石室掘方埋土が類似しており判然としなかった。

第 25 週（11／７～13）　９号古墳の断ち割りを拡張して、断面から石室掘方の検出を再度試みた結果、当初の想定より大きな石室掘方を確認した。AP12 グリッド付近で、斜面と直交する向きに約５ｍの下層確認用のトレンチを掘削した。

第 26 週（11／14～16）　９号古墳の石室掘方の掘削を完了し、完掘状況の写真を撮影した。墳丘下の全体図の測量を行い、調査を終了した。

なお、21 日から発掘区の埋め戻し作業を開始し、12 月９日に完了した。また、遺物の一次整理作業を 21 日から 29 日まで行った。今回の発掘調査成果を受けて、岐阜市教育委員会は岐阜県教育委員会に岐阜県遺跡地図の変更について報告し、県教育長は遺跡の位置・範囲・遺跡名称の変更及び新規登載を通知した（平成 29 年 12 月 12 日付け文伝第 71 号の 20 岐阜市教育委員会教育長あて県教育委員会教育長通知）。

整理等作業は、平成29・30年度に実施した。なお、自然科学分析は平成27年度に実施し、金属製品保存処理は平成29年度に実施した。

３　発掘作業及び整理等作業の体制

発掘調査の調査体制は、以下のとおりである。

センター所長	宮田敏光（平成 27 年度）、羽田能崇（平成 28～29 年度）、野村幹也（平成 30 年度）
総務課長	二宮　隆（平成 27～28 年度）、加藤武裕（平成 29～30 年度）
調査課長	成瀬正勝（平成 27 年度）、春日井恒（平成 28～30 年度）
調査担当係長	河合洋尚（平成 27～28 年度）、三輪晃三（平成 29～30 年度）
調査担当職員	長谷川幸志（平成 27 年度）、杉山忠弘（平成 27～30 年度）

写真１　調査着手前（南東から）

写真２　表土掘削作業風景

写真３　遺物包含層掘削作業風景

写真４　石室内掘削作業風景

写真５　石室内礫撤去作業風景

写真６　SD８掘削作業風景

写真７　遺構実測作業風景

写真８　現地見学会の様子

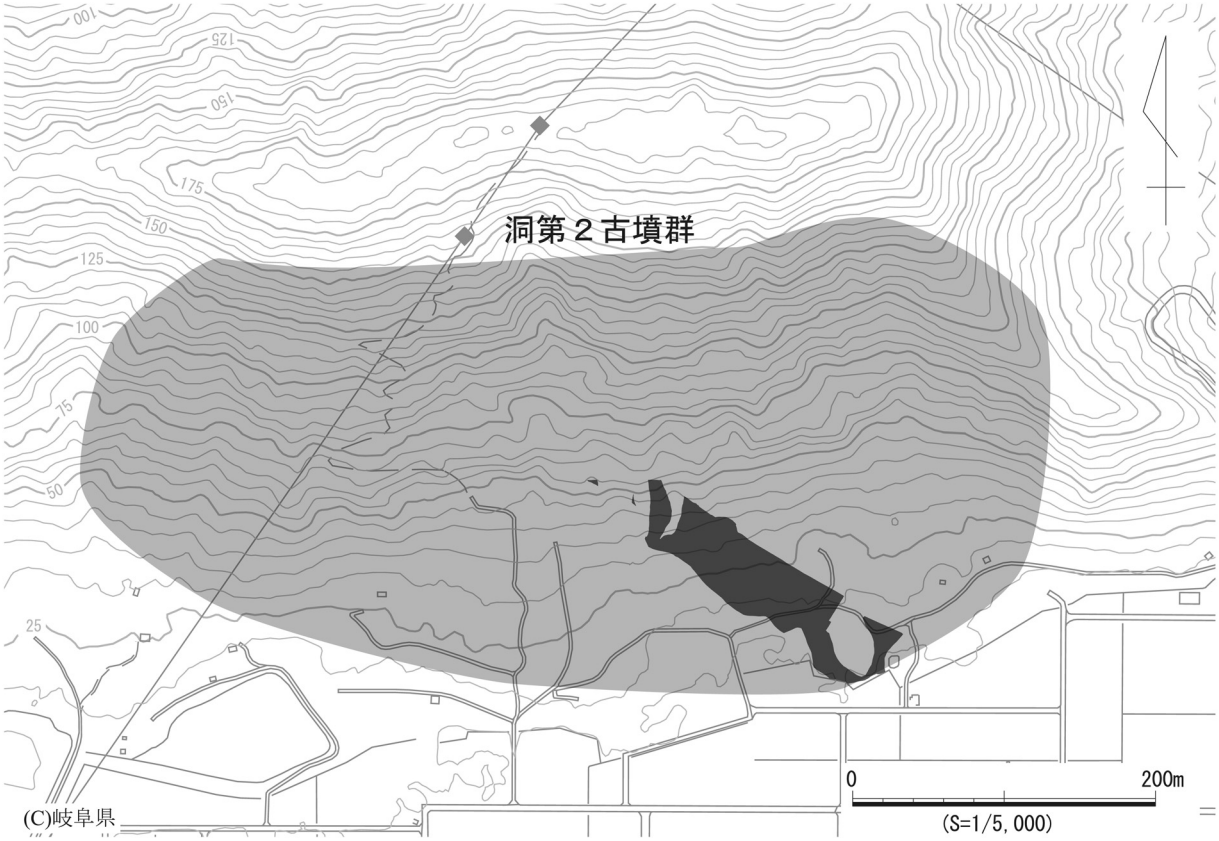
写真９　ラジコンヘリ景観写真撮影

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

当古墳群は、岐阜市の北西部、濃尾平野と接する美濃山地の南縁にあたる御望山（標高 225.3m）の東側南麓に位置する（第４図）。御望山は東西約 2.9㎞、南北約 0.6～1.2㎞の東西に細長く延びる独立峰である。東には城田寺古墳群の立地する城ヶ峰（標高 288.0m）、西南西約２㎞には船来山古墳群を有する船来山（標高 116.4m）及び郡府山（標高 110.0m）からなる独立丘陵がある。御望山周辺はこれらの山地が山脚によって谷底平野を区切り、小盆地状の地形を呈する。

御望山から城ヶ峰の南に広がる低湿な平野部は、長良川の支流である伊自良川や鳥羽川によって形成された。この平野部は長良川の河川堆積に伴う自然堤防と後述する黒野台地に囲まれ、昭和 44 年～52 年にかけて行われた土地改良事業によって、排水施設が整備されるまでは著しく低湿な後背湿地であった。しかし、こうした環境は初期の農耕生産にとってはむしろ適しており、生産拠点とされたことが遺跡の分布からも伺える。一方、御望山の東西を南流する伊自良川と板屋川の両河川に挟まれた黒野地区は、沖積低地面より約１～1.5mの高さながら、隆起扇状地性の台地をなす低位段丘面が約３㎢にわたって広がっており、御望山南麓から台地の北半分にかけては黒ボクに表面が覆われている。その縁辺部には縄文時代前期集落が発見された御望Ａ遺跡をはじめとする遺跡が分布する。



第４図　洞第２古墳群周辺地形図

御望山を含めた周辺山地の地質構成は、基本的に美濃帯の那比、上麻生及び金山ユニットに属する。古生代石炭紀前期から中生代白亜紀最前期にかけて、海洋プレートの移動に伴い、海底の堆積物と陸からの堆積物が混じり合い複合体（コンプレックス）を構成し、大陸の縁に付加したとされる。『１:200,000 地質図　岐阜』（通商産業省工業技術院地質調査所 1992）によれば、御望山の山体はチャート層が主体を占め、砂岩もみられる。南麓には北麓に比べチャートによる崩積性堆積物が緩斜面を為して広く分布しており、こうした背後斜面の崩壊によって、巨岩塊から細礫までさまざまな礫が混在する様相を呈している。当古墳群の所在する御望山南麓の現況は、こうして形成された山麓緩斜面を利用して果樹園（柿畑）が営まれている。

第２節　歴史的環境

当古墳群周辺には、旧石器時代から近世にかけて営まれた遺跡が分布している（第５図）。本節では、それらの概要を中心に年代順に記す。なお、文中の遺跡名の後の番号は、第５図及び表１と一致する。

旧石器時代　椿洞遺跡（43）がある。ナイフ形石器をはじめ、旧石器時代から縄文時代中期にかけての遺物が出土しており、「火山灰堆積が薄いこの地域において、旧石器編年の基軸となる史料」（岐阜県 2003）[1] と評価されている。

縄文時代　椿洞遺跡（43）、御望Ａ遺跡（75）、秋沢Ａ遺跡（13）、犬塚遺跡（９）、村山遺跡（30）、上城田寺遺跡（69）などがある。椿洞遺跡からは、早期末頃の土坑や中期の石囲炉を伴う竪穴建物２軒を検出しており、早期から中期の土器や石器のほか、草創期の有舌尖頭器等の石器類も出土している。御望Ａ遺跡は縄文時代から近世の複合遺跡で、前期後葉や中期後葉の竪穴建物 10 軒のほか、土坑 24 基、集石遺構 18 基などが検出された。出土遺物は前期に属する土器が多い。

弥生時代　下西郷一本松遺跡（103）、御望Ａ遺跡（75）、洞山上遺跡（３）、下城田寺山上遺跡（57）、下城田寺遺跡（60）、鎌磨遺跡（61）、打越遺跡（58）などがある。下西郷一本松遺跡は、弥生時代後半から中世にかけての遺構・遺物が検出されているが、弥生時代後期から古墳時代にかけての時期が中心となる。竪穴建物５軒や土坑などから、山中式併行期から元屋敷・廻間Ⅱ式併行期にかけての土器が出土している。御望Ａ遺跡からは、竪穴建物１軒や土坑を検出しており、竪穴建物からは口縁垂下部に赤彩の残る壺や器台、器台か高坏の脚部が出土している。洞山上遺跡、下城田寺山上遺跡、下城田寺遺跡、鎌磨遺跡、打越遺跡は平野に面した丘陵や山麓などに立地している。高坏や広口壺などが採集されているほか、打越遺跡からは土器と共に木製鋤が出土したとされる（岐阜市 1979）。

古墳時代　当古墳群周辺には４世紀から７世紀にかけて多くの古墳が築造されている。４世紀から５世紀代の古墳には、東では鎧塚古墳（49）のほか、坂尻古墳群（63）や鎌磨古墳群（59）など、西では宝珠古墳（25）、船来山古墳群（89）、明音寺古墳群（84）、小山古墳（４）などがある。６世紀から７世紀にかけては横穴式石室を伴う小規模な古墳が数多く築造され、丘陵や山麓の尾根上、山裾の緩斜面上に分布する。各古墳群の規模は数基から十数基といったところであるが、船来山古墳群は群を抜いており、また、上城田寺第１～第４古墳群（68・70～72）も合わせて 68 基の古墳が存在するとされている（岐阜市教育委員会 1994）。御望山には当古墳群のほか、洞第１古墳群（２）、御望古墳群（５）、犬塚古墳群（８）がある。鎧塚古墳は城ヶ峰の東、眉山（標高 231.2m）の山頂に所在する全長 82mの前方後円墳で、４世

紀後半の築造とされる。その立地や規模から、同時期に中・小古墳を築造した周辺地域の豪族の連合の上に立つか、あるいは何れかの勢力の代表者の存在が指摘されている[2)]。坂尻１号古墳、鎌磨１号古墳は城ヶ峰の支丘上に位置する。坂尻１号古墳は大正時代に発掘が行われ、舶載獣文帯三神三獣鏡と仿製鏡の他、石釧（くしろ）、合子（ごうす）、琴柱形石製品、鍬形石などが出土している。獣文帯三神三獣鏡は静岡県銚子塚古墳、山梨県大丸山古墳の出土鏡と同笵である[3)]。鎌磨１号古墳からは舶載方格規矩鏡、石製合子、石釧、埴輪片などが出土している。いずれも直径 27～30mの円墳で４世紀後半の築造が想定されている。宝珠古墳は全長 48mの前方後円墳で、仿製鏡２面の他、勾玉、管玉、石釧、紡錘車、埴輪片などが出土し、４世紀後半の築造が想定されている。船来山古墳群は 290 基の古墳が群集し、弥生時代の方形周溝墓・土坑墓３基、前期古墳 20 基、中期古墳３基、後・終末期の横穴式石室 202 基が確認されている[4)]。前期には前方後円墳、前方後方墳、円墳、方墳と多彩な墳形がみられる。24 号古墳は推定直径約 20mの円墳で、仿製三角縁六神鏡を含む５面の鏡のほか、玉類、石釧、鉄製武器類、鉄製工具類、銅鏃など豊富な副葬品を出土しており、その出土量は船来山古墳群の前・中期古墳の中でも群を抜いている。また、後期では横穴式石室に加え竪穴系横口式石室が数多く検出されており、馬具や装飾大刀をはじめ豊富な副葬品が出土している。272 号古墳は左片袖式(奥壁から入口に向かって左に袖部を有す)の竪穴系横口式石室を有する円墳で、隣接する 19 号古墳、274 号古墳と共に石室内面にベンガラを塗布した「赤彩古墳」である。赤彩古墳は県内では他に２基しか確認されておらず、１つの古墳群に３基確認された事例は稀である。馬具や、県内では多治見市虎渓山１号古墳での出土例しかない捩環頭柄頭等の刀装具などが出土している。小山古墳は御望山の南に延びる支丘から平野に移行する場所に位置し（岐阜市 1979）、周濠をもった直径 28mの円墳である。玉類を出土しており５世紀代の築造が想定され、洞地区では最も古い古墳である。洞第１古墳群は、御望山の中央部から南に張り出した支丘上にあり、径８～10mの円墳８基の存在が知られている。そのうち横穴式石室を確認できるものは２基で、１号古墳からは玉類や五獣鏡が出土し、洞第２古墳群と同時期の古墳群とされる（岐阜市 1979）。上城田寺第２古墳群に属する上城田寺長屋１号古墳は、城ヶ峰南麓から南に張り出す小丘陵の最高所に位置する。岐阜市では最大規模を誇る片袖式の横穴式石室（全長 10m、玄室長 6.1m）をもち、馬具等が出土した。石室の形態・規模、出土遺物から上城田寺古墳群における盟主墳であると推測されている（岐阜市教育委員会 1985）。また、上城田寺第４古墳群では分布調査によって 17 基が確認されていたが、平成３～４年の発掘調査において 14 基の調査が行われた。径 10m前後の小円墳からなる典型的な後期群集墳とされ、土器（須恵器、土師器）、武具（大刀、小刀）、装身具（耳環、玉類）、工具（刀子、紡錘車）などが出土している。墳丘や石室規模、崩積性堆積物によって埋没していた点など、当古墳群と類似する点が多い。

古代　御望Ａ遺跡（75）、須山窯跡群（36）、弥勒寺遺跡(弥勒寺跡)（90）、席田郡家推定地（99）、席田郡府遺跡（100）などがある。御望Ａ遺跡では、７～８世紀頃と推定される竪穴建物 23 軒・土坑２基が検出され、須恵器、土師器、堅塩製作用土器などが出土している。須山窯跡群は、小丘陵の南斜面に複数基の窯跡が存在するとされ、窯跡に伴う６世紀末から７世紀初頭の須恵器が出土した。弥勒寺遺跡（弥勒寺跡）では四重弧文軒平瓦や奈良時代前期の瓦が確認されており、寺域は約 100m四方と推定されている。席田郡家推定地は、席田廃寺跡（図外）とともに席田郡府遺跡内にある。席田郡は、『続日本紀』中に 715（霊亀元）年に本巣郡から分かれて建郡され、新羅系の渡来人を入植させたとあり、現在も大字「郡府」という地名が残る。また、これらの遺跡の東側では、古代須恵器、灰釉陶器等が多数確認され、集落

跡が広がっていた可能性についても指摘されている（本巣市教育委員会 2012）。

中世・近世　上保本郷遺跡（98）、黒野城下町遺跡（78）、正傳寺跡（95）などがある。上保本郷遺跡からは、室町時代の館跡が確認され、館を区画する大溝からは京都系土師器皿を含む多数の土師器皿が出土したほか、金属鉱物が付着した坩堝や大型の鞴羽口などの鍛冶関連遺物も出土している。黒野城下町遺跡は、黒野台地の南端に立地し、1594（文禄３）年に加藤貞泰が城主となった黒野城の城下町を範囲とする。黒野城は 1610（慶長 15）年、貞泰の転封に伴い廃城となった。平成 25 年度から黒野城跡の発掘調査によって、土塁や虎口の石垣などが確認されている。正傳寺跡は船来山に連なる郡府山の南斜面に立地している。正傳寺は、記録に拠れば安永年中（1772～1780 年）に創建された臨済宗の寺院とされる。石組みの基壇と礎石建物を確認し、江戸時代後期に属する遺物を確認している。

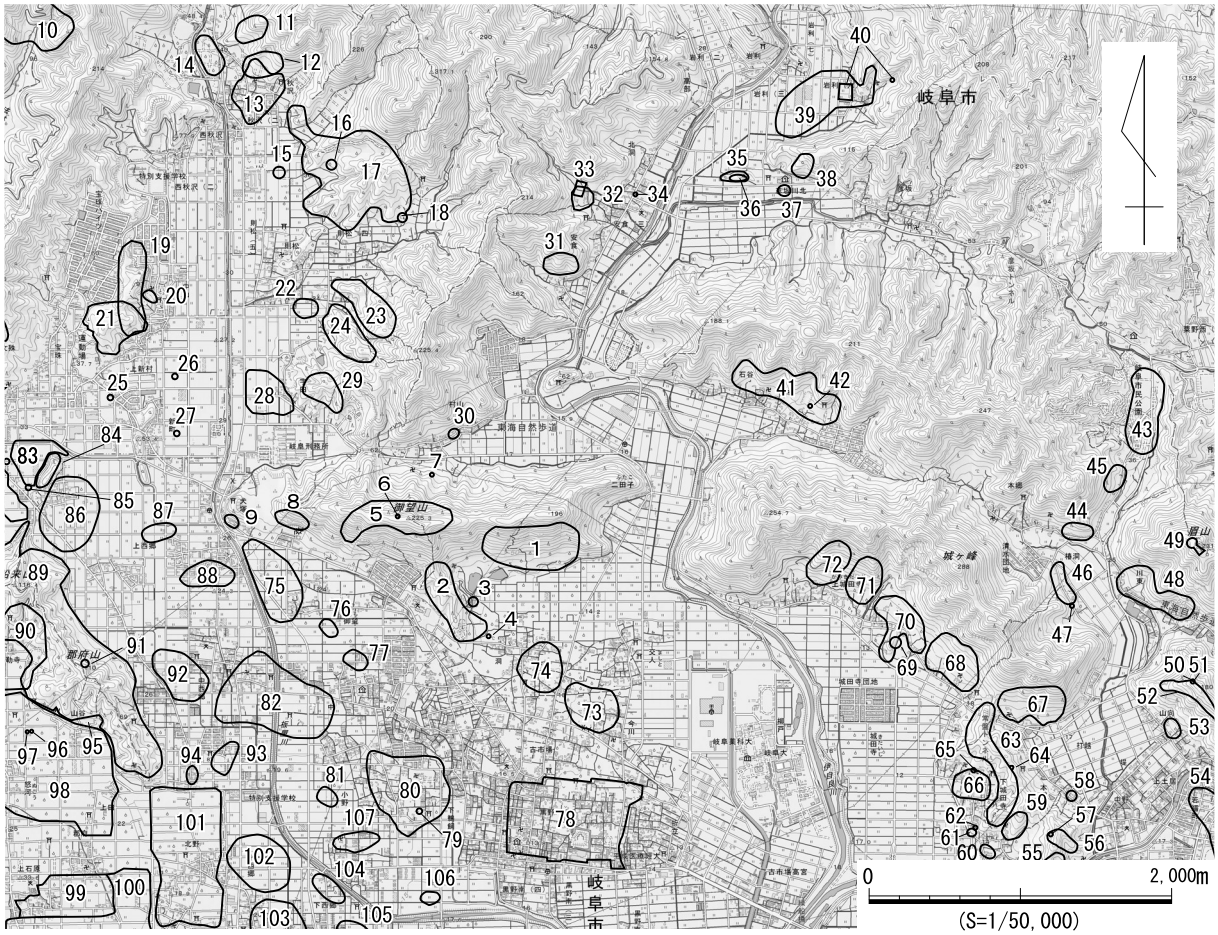
注

１）長屋幸二 2003「第１章　旧石器時代」『岐阜県史』（考古資料）、岐阜県 13 頁

２）楢崎彰一 1980「第五章　古墳時代」『岐阜市史』（通史編）、137 頁

３）岐阜市教育委員会 1979『岐阜市史』（史料編　考古・文化財）、196 頁

４）本巣市教育委員会 2017『本巣市船来山古墳群総括報告書』（本文編）



第５図　周辺遺跡位置図（S=1/50,000）

（国土地理院電子地形図 25000「北方」「岐阜北部」「岩佐」「美濃神海」平成 28・29 年調整）を元に、50%縮小して作成

表１　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代
1	洞第２古墳群	古墳
2	洞第１古墳群	古墳
3	洞山上遺跡	弥生
4	小山古墳	古墳
5	御望古墳群	古墳
6	鵜飼山城跡	中世
7	御望山城跡	中世
8	犬塚古墳群	古墳
9	犬塚遺跡	縄文・弥生
10	祐向谷遺跡	古代～近世
11	秋沢第１古墳群	古墳
12	秋沢第２古墳群	古墳
13	秋沢Ａ遺跡	縄文～中世
14	秋沢Ｂ遺跡	古代
15	秋沢Ｃ遺跡	古代・中世
16	秋沢Ｄ遺跡	古代
17	秋沢大洞古墳群	古墳
18	大洞中世墓	中世
19	宝珠古墳群	古墳
20	中山古窯跡	古代
21	文殊中山洞遺跡	弥生～近世
22	則松遺跡	古代
23	則松第１古墳群	古墳
24	則松第２古墳群	古墳
25	宝珠古墳	古墳
26	上新村遺跡	古代
27	下新村遺跡	弥生
28	宇田遺跡	古墳・古代
29	宇田古墳群	古墳
30	村山遺跡	縄文
31	安食古墳群	古墳
32	安食上洞遺跡	中世
33	芦敷城跡	中世
34	安食遺跡	古代・中世
35	須山古墳群	古墳
36	須山窯跡群	古代

番号	遺跡名	時代
37	彦坂遺跡	弥生
38	彦坂古墳群	古墳
39	岩利洞前遺跡	古代～中世
40	岩利城跡	中世
41	石谷古墳群	古墳
42	石谷城跡	中世
43	椿洞遺跡	旧石器・縄文
44	椿洞第１古墳群	古墳
45	椿洞第２古墳群	古墳
46	椿洞第３古墳群	古墳
47	椿洞７号古墳	古墳
48	椿洞打越古墳群	古墳
49	鎧塚古墳	古墳
50	岩崎城跡	中世
51	鶴山城跡	中世
52	鶴山古墳群	古墳
53	山向古墳群	古墳
54	八代遺跡	古墳～中世
55	西屋敷古墳群	古墳
56	中野古墳群	古墳
57	下城田寺山上遺跡	弥生
58	打越遺跡	弥生
59	鎌磨古墳群	古墳
60	下城田寺遺跡	弥生
61	鎌磨遺跡	弥生
62	下城田寺中世墓	中世
63	坂尻古墳群	古墳
64	小山城跡	中世
65	城田寺城跡	中世
66	城田寺葭原遺跡	古代・中世
67	打越北山古墳群	古墳
68	上城田寺第１古墳群	古墳
69	上城田寺遺跡	縄文
70	上城田寺第２古墳群	古墳
71	上城田寺第３古墳群	古墳
72	上城田寺第４古墳群	古墳

番号	遺跡名	時代
73	今川遺跡	古代・中世
74	黒野洞遺跡	古代・中世
75	御望Ａ遺跡	縄文～近世
76	御望Ｂ遺跡	中世
77	御望Ｃ遺跡	中世
78	黒野城下町遺跡	近世
79	小野城跡	中世
80	小野Ａ遺跡	古代・中世
81	小野Ｂ遺跡	古代・中世
82	中西郷中遺跡	古代・中世
83	文殊明音寺遺跡	古墳～近世
84	明音寺古墳群	古墳
85	山西２号古墳	古墳
86	上西郷Ａ遺跡	古代・中世
87	上西郷Ｂ遺跡	古代
88	上西郷Ｃ遺跡	古代・中世
89	船来山古墳群	古墳
90	弥勒寺遺跡（弥勒寺跡）	縄文～近世
91	舟木城跡	中世
92	中西郷Ａ遺跡	古代・中世
93	中西郷Ｂ遺跡	古代
94	中西郷Ｃ遺跡	古代
95	正傳寺跡	中世・近世
96	上保岩坪１号古墳	古墳
97	上保岩坪２号古墳	古墳
98	上保本郷遺跡	古墳～近世
99	席田郡家推定地	縄文～近世
100	席田郡府遺跡	縄文～近世
101	元正寺遺跡	弥生～近世
102	小西郷遺跡	古代・中世
103	下西郷一本松遺跡	弥生～古代
104	下西郷Ａ遺跡	古代～中世
105	下西郷Ｂ遺跡	古代
106	下西郷Ｃ遺跡	古代～中世
107	下西郷Ｄ遺跡	古代・中世

岐阜県教育委員会 2007『改訂版岐阜県遺跡地図』をもとに作成し、時代については岐阜市教育委員会及び本巣市教育委員会に確認をとり一部修正を加えた。

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

当遺跡は、御望山斜面から流出した堆積物によって形成された小規模な扇状地形に立地している。このような立地であるため、斜面上方からの土砂の供給は規模に関わらず常にあったと考えられ、場所によって堆積の状況が大きく変化する（第６・７図）。

１　Ⅰ層

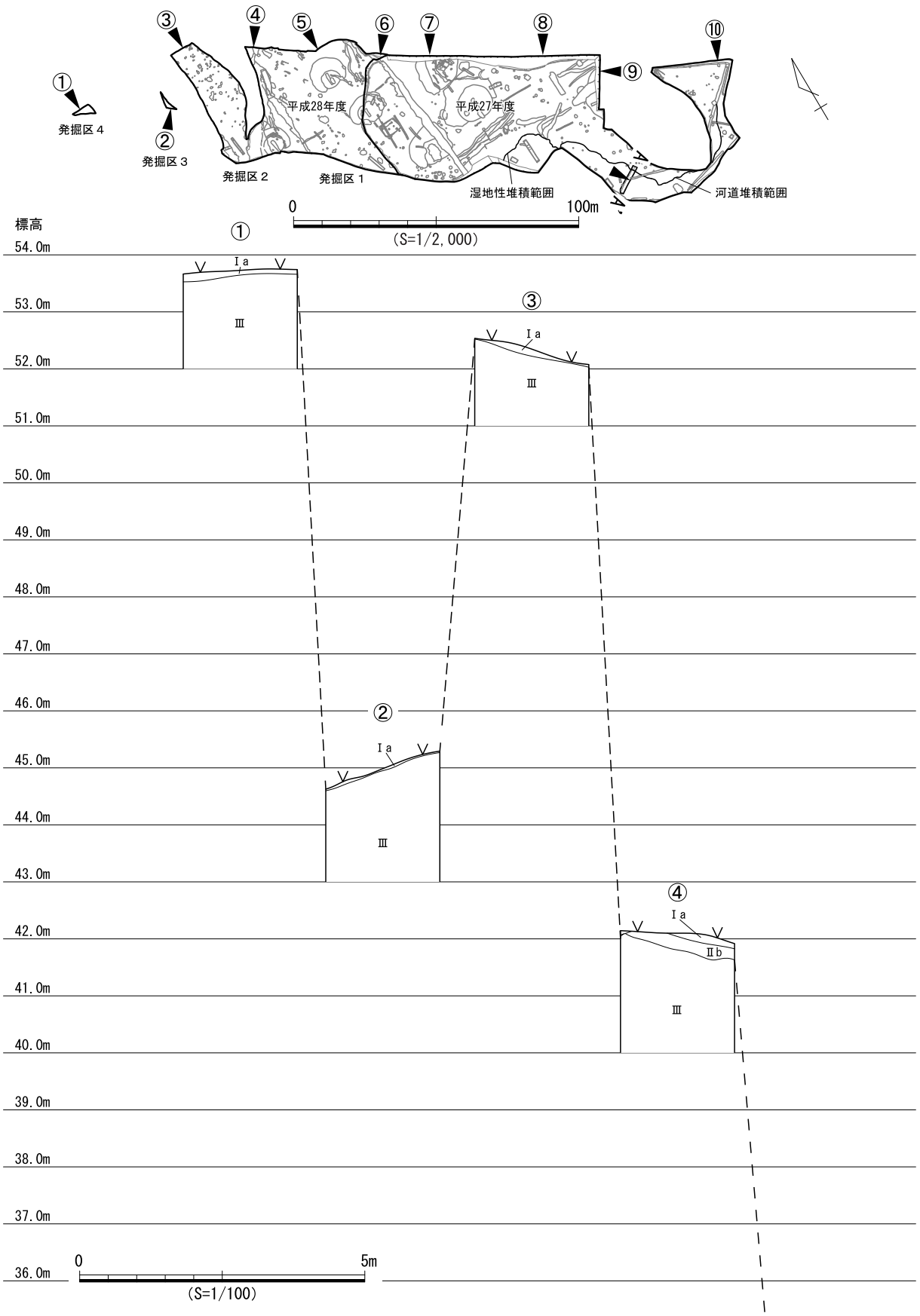
山林や柿畑営農に伴う土壌化層とその基盤となっている厚い砂礫層である。土壌化層（Ⅰａ層）は、山林や営農によって下層の砂礫層（Ⅰｂ層）が変化したもので、Ⅰａ層が雨水などにより流出した範囲は、Ⅰｂ層が露出している。Ⅰｂ層は近世以降の崩積性堆積層と推定され[1)]、近世以前の旧谷地形を埋め、現況地形の形成に大きな影響を与えている。発掘区北壁面の観察から、AG14 グリッド付近でⅠｂ層の端部を確認できるため、この斜面上方に扇頂をもち南東方向に広く流出したと考えられる。旧谷地形の底にあたる BO５グリッド付近では厚さ約４ｍに及ぶが、ここから南東に向かって標高が高くなることから、２号古墳及び３号古墳の周囲では比較的薄い。また、旧谷地形の東側では傾斜が若干緩やかになっており、Ⅰｂ 層中にラミナが観察される。このことから旧谷地形の東側の堆積は、二次堆積によるものと考えられる。また、SD３や SD８などの大溝の最終的な埋土はこの砂礫層であり、これらの遺構は崩落があった段階でまだ窪んだ状態にあったと考えられる。一方、AG14 グリッド以西では尾根（以下、「旧尾根地形」という。）と谷が連続する地形となっており、旧尾根地形ではⅠｂ 層の堆積は見られずⅠａ層のみの堆積であるが、旧谷地形には AG14 グリッド以東と同様にⅠｂ層の堆積が確認できることから、AG14 グリッド以東とは別の扇頂に由来する崩積性堆積の可能性がある。なお、洞北山２号・３号古墳が立地する尾根の周囲には、やや締まりの悪い砂礫層が堆積している。断ち割り調査の結果（第８図）、Ⅲ層より新しい堆積であり、粒子が荒い砂礫で構成されることから、ごく短い期間に山際の河道[2)]を埋め尽くしたと考えられる。

２　Ⅱ層

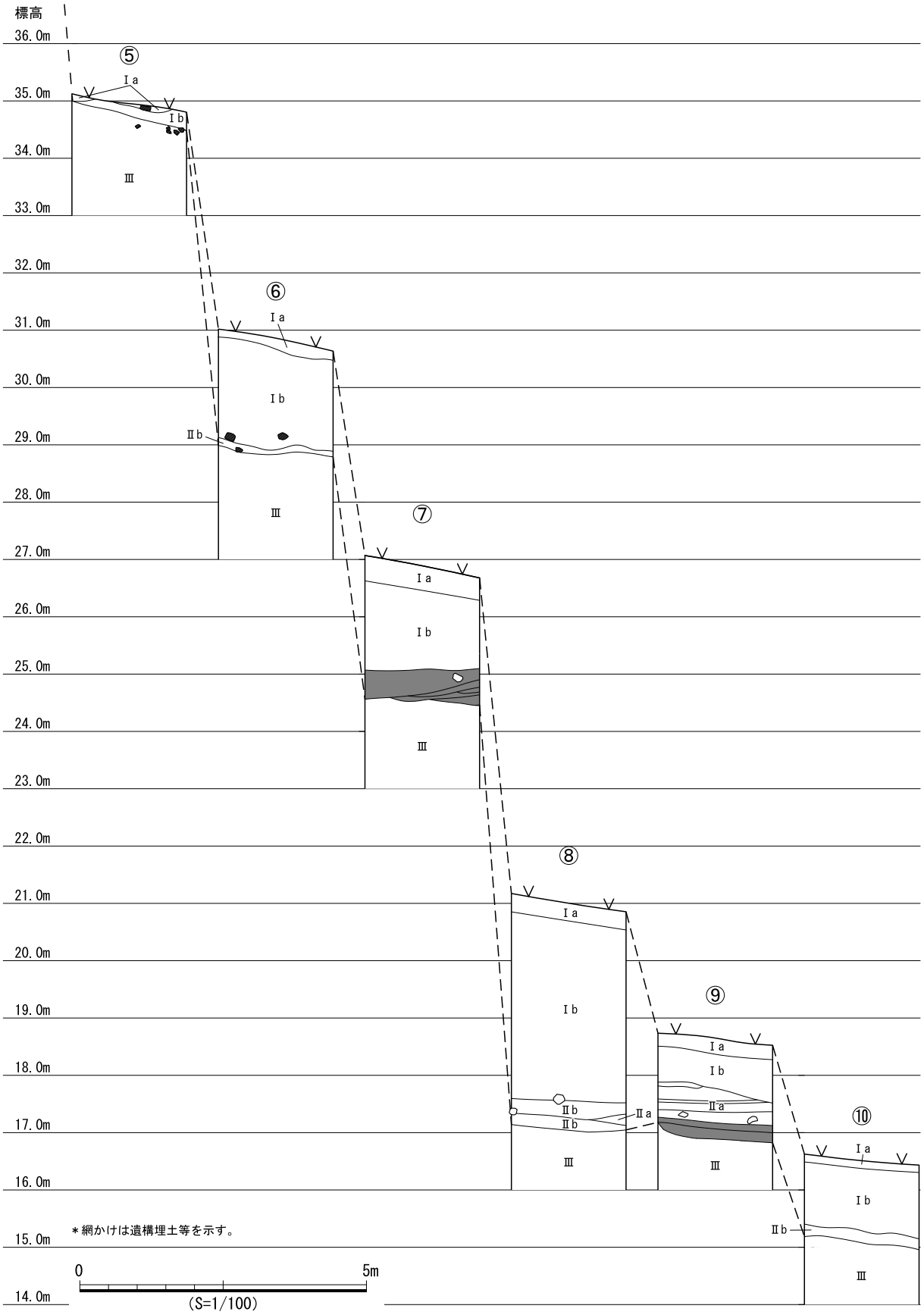
中世以降の平場に伴う造成土（Ⅱａ 層）及び、土壌化が進む古墳時代以降の崩積性堆積による黒色から黒褐色土の層（Ⅱｂ層）に分けた。Ⅱａ層は、混じりが多くⅡｂ層とは色調の違いが顕著である。Ⅱｂ 層については、遺構埋土との色調が類似しており判別が困難であるため遺物包含層とした。特に平成 27 年度発掘区の西部では、Ⅲ層に含めた古墳時代の旧表土とも厳密な区別が付かなかったため、ともに除去して遺構検出を行った部分も多い。しかし、この範囲では遺物の集中が見られたため、本来遺構があった可能性も考えられる。なお、平成 28 年度の発掘区２・３・４ではⅡ層は確認できなかった。

３　Ⅲ層

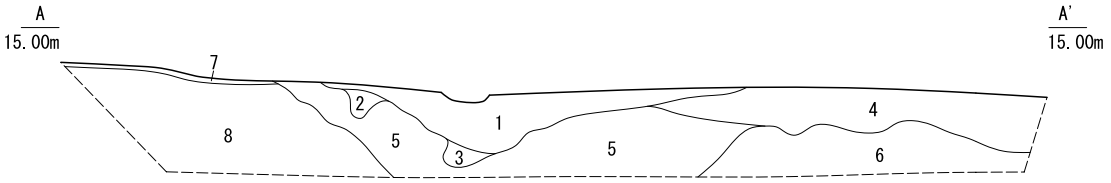
古墳時代の旧表土を含む土壌化の進行が遅い、古墳時代以前の崩積性堆積層を基盤層とした。古墳時代の旧表土は、斜面下方ではⅡ層に比べ礫の混じりが少なく安定している。この上面ではⅡ層と比べると遺構埋土との色調の差が比較的顕著である。SD８や６号古墳の石室掘方の壁面では、黄褐色砂



第６図　基本層序模式図（１）



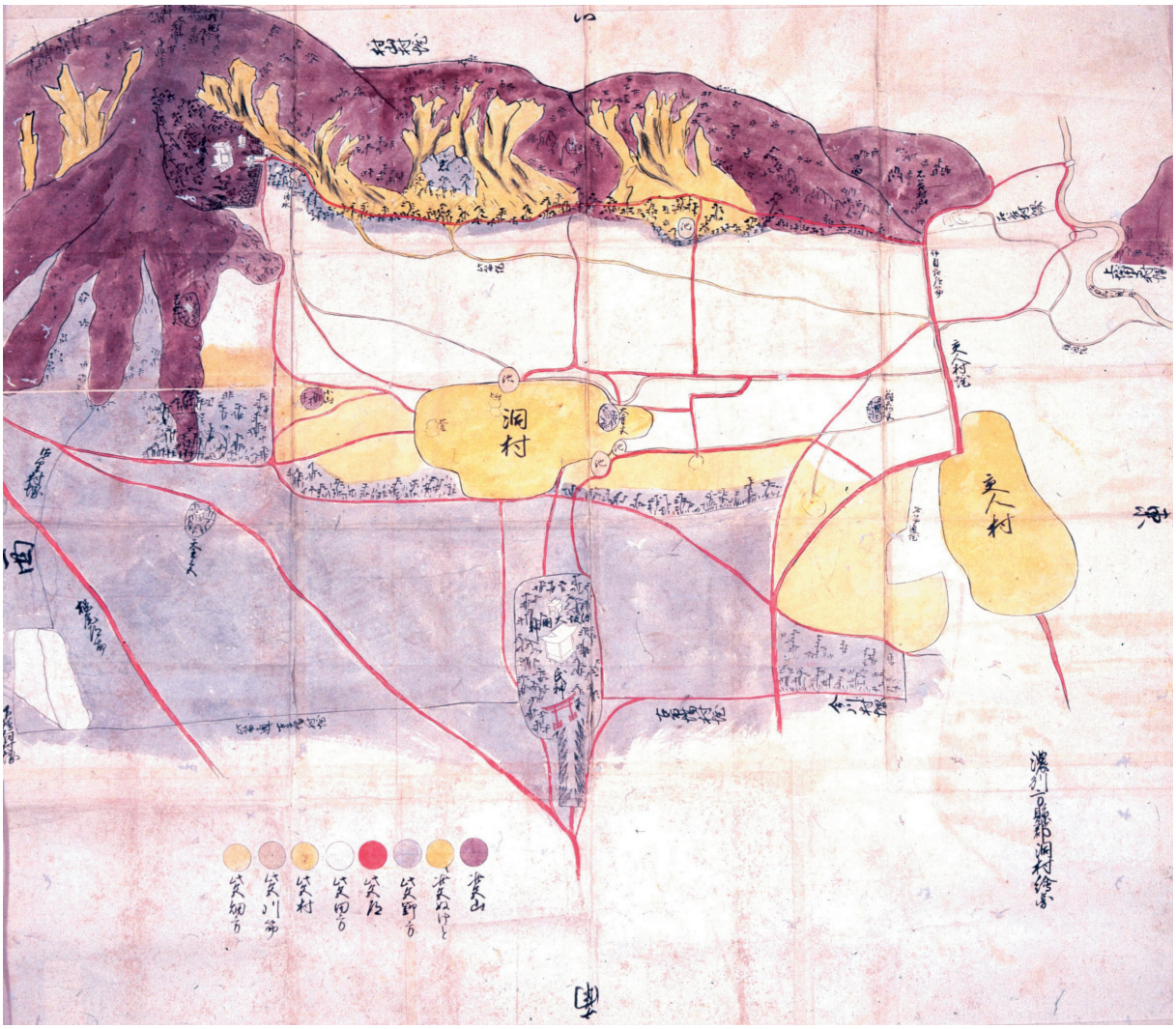
第７図　基本層序模式図（２）



1　10YR2/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性ややあり　径1～5cmの角礫を15%含む　旧河道堆積
2　10YR4/1　褐灰色粘質シルト　しまる　粘性ややあり　径1～15cmの角礫を20%含む　倒木痕か
3　10YR3/4　暗褐色砂礫土　しまる　粘性ややあり　径1～15cmの角礫を30%含む　旧河道堆積
4　10YR6/4　にぶい黄橙色砂礫土　しまる　粘性なし　粗砂～径10cm程度の角礫　旧河道堆積
5　10YR6/3　にぶい黄橙色砂礫土　しまる　粘性なし　粗砂～径20cm程度の角礫　ラミナ堆積　旧河道堆積
6　7.5YR5/6　明褐色砂礫土　しまる　粘性なし　粗砂～径20cm程度の角礫　全面に鉄分沈着　湧水あり　旧河道堆積
7　10YR3/2　黒褐色粘質シルト　しまる　粘性ややあり　径0.5～5cmの角礫を10%含む　漸移層　Ⅲ層（黒褐色土）
8　10YR5/4　にぶい黄褐色砂礫土　しまる　粘性なし　粗礫～20cm程度の角礫　Ⅲ層（黄褐色土）

第８図　下層確認トレンチ土層断面（第６図 A-A’ 断面）

礫層から黒褐色土層への漸移的変化を複数層に渡って確認することができることから、斜面の崩落による扇状地形形成と土壌化を繰り返してきたと考えられる。このような形成過程を経ているため、基盤の堆積状況は一様ではない。そこで表記の仕方は、Ⅲ層（黒褐色土）やⅢ層（黄褐色土）のように色調を基準とし、下層の同色層についてはⅢ層（黒褐色土②）のように丸数字で記す。ただし、順序を示すのみで対応する数字の土層が、同一土層とは限らないことをあらかじめ述べておく。



第９図　濃州方県郡洞村絵図（宝暦４年）

（松井家蔵　岐阜市歴史博物館寄託）

今回検出した墳丘の残る古墳は、すべてⅢ層（黒色土）からⅢ層（黒褐色土）の上面に築かれている。この層と同様な黒色土が旧谷地形部に比較的厚く堆積している。

注

１）御望山調査検討会（2006）によると、宝暦４年（1754 年）に描かれた絵図（第９図）と現状地形から、当該地が天正地震以降の崩積性堆積土に覆われていることを推定している。

２）断ち割り調査の土層観察から５層ではラミナが観察され、また６層では湧水がみられたことから、これらの堆積物が河道に堆積したものと判断した。なお、旧谷地形の出口にあたる、４号古墳南側の発掘区南壁付近では湿地性堆積を確認しており、発掘区の南側には低湿地が広がっていたと推測される。

第２節　遺構・遺物の概要

１　遺構の概要

（１）遺構の概要

今回の調査では、10 基の古墳及び周溝の一部を検出した。周溝のみの調査となった３号古墳以外の９基は、埋葬施設（横穴式石室・木棺直葬・小石室）を確認した。また、古墳のほかに焼礫集積土坑、竪穴建物、配石遺構、道路状遺構、火葬施設、溝、平場、土坑などを検出した。古墳以外の遺構は表２のとおりである。時代は縄文時代から中世まであり、断続的に当地が利用されてきた状況が判明した。本書で用いた遺構の種別は以下のとおりであり、略号と番号を付してそれぞれ識別できるよう表示した。

焼礫集積土坑・炉跡（SL）　底面や壁面に被熱痕跡が確認できる。又は、被熱した礫を土坑内に集積したもの。

竪穴建物（SI）　竪穴状に穴を掘り、その内部に柱穴、床を確認できる。

配石遺構（SS）　人為的に石を配置したことが確認できる。

道路状遺構（SF）　路体又は路床において特定の道路痕跡が認められる[1)]。

火葬施設（ST）　底面や壁面に被熱痕跡が確認でき、かつ骨片や釘が出土する。また、底面や壁面に被熱痕跡が確認できない場合でも、骨片が出土している場合は火葬施設とした。

溝（SD）　上端の短軸（幅）に対し、長軸（長さ）が３倍以上の長さとなる遺構。ただし、３倍以上の長さとならない場合でも､発掘区外への延長により３倍以上と想定できるものについては溝とした。

平場（SM）　段切り造成による平面や、盛土による広範囲の平坦面が確認できる。

土坑（SK）　人為的に掘り窪められた穴のうち、明確に性格付けできないもの。

斜面に残された溝状の浸食痕跡（NE）　上端の短軸（幅）に対し、長軸（長さ）が３倍以上の長さとなるもののうち、人為的に掘られたと判断できないもの。３倍以上の長さとならない場合でも、浸食による土坑状の穴と判断できた場合は、浸食痕跡に含めた。

倒木痕・根痕（NW）　下層の土が上層に持ち上げられている。

自然流路（NR）　現況の谷地形。崩積性堆積物（Ⅰ層）が堆積する。

表２　古墳以外の遺構検出数

遺構種別	SL	SI	SS	SF	ST	SD	SM	SK	NE	NW	NR
検出数	4	1	1	1	4	12	3	113	28	6	3

（２）古墳の計測と各部名称

古墳の規模は、掲載図面上で計測した数値を記載した。古墳各部の計測位置と名称については、次のとおりである。

・横穴式石室を埋葬施設にもつ古墳の墳丘は、『発掘調査のてびき』[2)] に倣い、石室の構築に伴い横穴式石室を覆う盛土を「第一次墳丘」、その上にさらに積み重ね墳丘を築造する盛土を「第二次墳丘」として区別した。

・墳丘の計測は、計測点を明記し、その水平距離若しくは垂直距離を計測した。

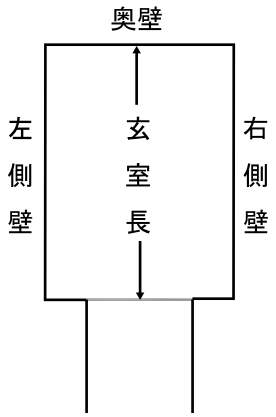
・周溝の計測は、『発掘調査のてびき』「溝」に倣い、溝の肩部にあたる傾斜変換点の水平距離を幅の規模、最上面から最深部までの垂直距離を深さとして計測した。

・横穴式石室側壁の呼称は、『発掘調査のてびき』に倣い、石室入口から奥壁をみて右手を右側壁、左手を左側壁とした（第 10 図）。竪穴状のものについては方位をつけ、北壁、東壁のように表記した。その他、石室構造に関する各部位の名称は、小幡・近藤（2001）[3)] による定義に準拠した。

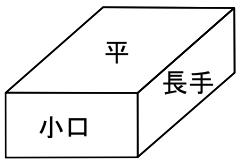
・玄室長の計測は、袖石を有する場合は、奥壁から袖石手前までの長さを計測し、袖石を有しない場合も立柱石によって玄室と羨道を分けているものは立柱石手前までの長さを計測した。袖石が失われている場合は推定値を記載した。

・羨道及び前庭長は、袖石から羨門までの長さを計測し、羨門がない場合は側壁の南端までの長さを計測した。

・石室を構成する石材の積み方の呼称は、成瀬（1999）[4)] を参照し、壁面に表れる面によって「小口積み」「長手積み」「平積み」とした（第 11 図）。



第 10 図　石室壁体の名称



第 11 図　石材各面の名称

（成瀬 1999）

（３）遺構一覧表

古墳以外の遺構のうち、竪穴建物付属遺構・道路状遺構の硬化面・溝・土坑については一覧表に示した。遺構一覧表の各項目内容は次のとおりである。

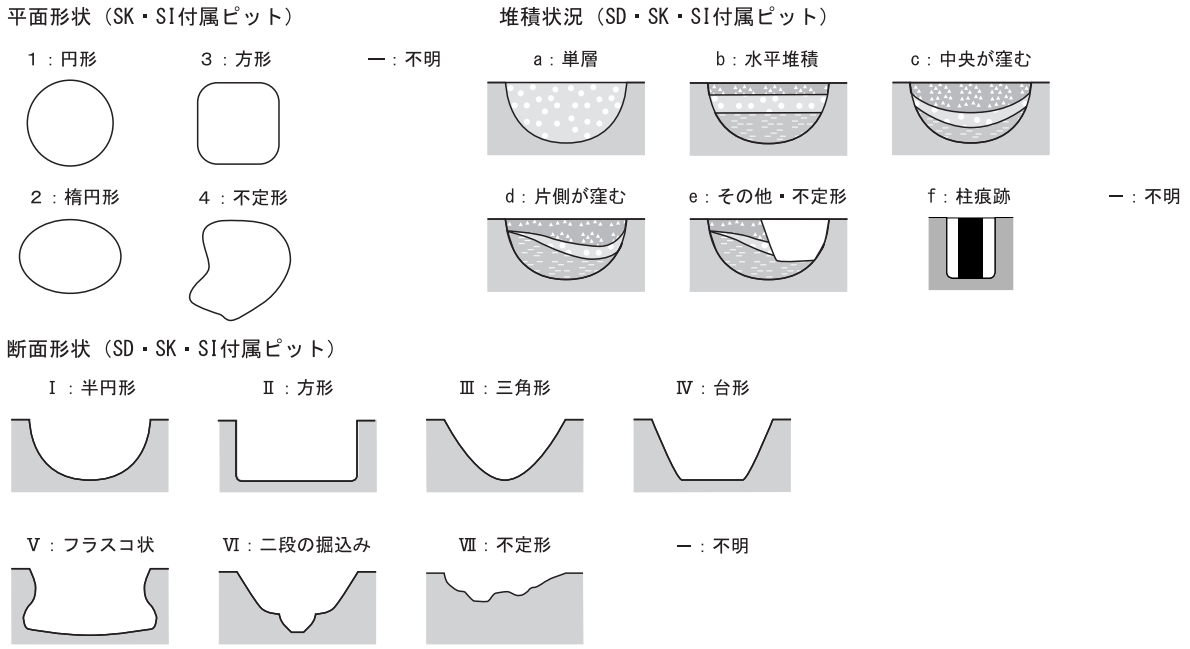
地区　遺構を検出した地区を示し、複数の地区にまたがる場合は「～」で結んだ。

検出面　基本層序（本章第１節）と検出面で表し、Ⅲ層上面で検出した場合は「Ⅲ上」と表記した。

平面形・断面形・堆積状況　第 12 図のように分類し、記号で表した。

規模　単位はｍであるが、全形が確認できず残存長を測ったものは（　）で示した。

長軸方位　長軸方向の方位を計測した。なお、計測値は、北から東西へ傾く角度を 90°以内で示し、N-●°-E（W）と表記した。



第 12 図　土坑等分類模式図

重複関係　重複する遺構については、その遺構より新しい遺構の番号を「新」、古い遺構の番号を「古」に記載した。

出土遺物　次の略号と出土点数（ただし、土器は注記できない細片を除く）で表示した。

H－弥生土器・土師器類　P－須恵器　K－灰釉陶器　Y－山茶碗　T－陶器類（P・K・Y を除く）

S－石器・石製品　I－金属製品　C－炭化物　N－種子類　B－骨類

２　遺物の概要

（１）遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は 1,164 点（ただし、土器は注記できない細片を除く）であった。所属時期は古墳時代を中心に縄文時代から近世まで長期間にわたる。遺物は、土器類、石器・石製品、金属製品が出土し、その他には炭化物、骨片、種子がある。土器類、石器・石製品、金属製品、種子は出土点数、その他は取上点数で表記した。数量は表３のとおりである。なお、この中には試掘・確認調査で出土した遺物を含む。

①土器類

土器類は、弥生土器・土師器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、中近世陶器がある。接合後の破片数は表４のとおりである。接合後の破片数は、弥生土器・土師器が全体の 87.8％を占めるが、接合したものは 24.8％に留まる。一方、須恵器の全体に占める割合は 10.1％であるが、接合比率は 64.9％と高い。

以下、種別ごとに概要を示す。なお、点数はすべて接合後の破片数である。既存の研究をもとに器種の判別を行った。

弥生土器・土師器　563 点出土した。大半は細片であり、器種・時期ともに特定できるものは少ない。器種は弥生時代末期から古墳時代初頭の壺・甕・高坏・鉢、古墳時代後期から古代の甕・碗、中世の土師器皿である。

表３　出土遺物一覧表（遺物包含層を含む）

遺構名・遺構略号	調査時遺構番号	弥生土器・土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中近世陶器	石器・石製品	金属製品	その他	合計
３号古墳	085	1								1
４号古墳	068 069 070 238	22	145	1	1		1	48		218
５号古墳	071 072 073 074 122	8					1	12		21
６号古墳	038 039 040 231	100	2					23	1	126
７号古墳	001 002 003 040 237 338 339 382		6	1						7
８号古墳	301 302 303 384		2	1		1				4
９号古墳	322 323 324	13	2						3	18
SL１	159								3	3
SL２	160								2	2
SL３	162								1	1
SI１	010 023 024 025 026 027 028 029 030 031	57								57
SS１	368 378 379			1					5	6
SF１	078 079 081 099 100 101 102 103 106 107 108	8					2			10
ST１	121								15	15
ST２	119					1			14	15
ST３	230							3	6	9
ST４	48							25	17	42
SD４	82	17								17
SD８	022 350	4	2							6
SM１	―	2								2
SM２	―		3							3
SK51	077	2								2
SK79	066	1								1
SK93	064	2								2
SK95	041	6								6
NE２	075		1							1
撹乱坑	220 224 228 316	2	3			1	1		1	8
試掘坑	TP2						1			1
	TP5	1								1
遺物包含層	―	503	19	13	0	4	10	0	10	559
小計		749	185	17	1	7	16	111	78	1,164

表４　土器類出土点数

	弥生土器・土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	中近世陶器	合計
接合前破片数（ａ）	749	185	17	1	7	959
接合後破片数（ｂ）	563	65	5	1	7	641
（ｂ）の全体に対する割合（%）	87.8	10.1	0.8	0.2	1.1	100.0
接合比率（%）	24.8	64.9	70.6	0.0	0.0	33.2

須恵器　65 点出土した。古墳の石室内から出土したものには、蓋、坏身、有蓋高坏、無蓋高坏、短頸壺、直口壺、特殊小型壺、提瓶、平瓶がある。65 点中 27 点は石室以外からは周溝、古墳周辺の遺構や遺物包含層から出土している。SM２の造成土中からは８世紀代の有台坏の破片が出土している。産地・時期は渡邉博人、田辺昭三、斎藤孝正の研究を参照した[6]。

灰釉陶器　５点出土した。古墳の周溝から瓶類の破片が出土したほか、配石遺構 SS１に伴い、碗と小瓶が出土した。産地・時期は斎藤氏の研究を参照した[7]。

山茶碗　１点出土した。４号古墳の周溝から出土している。産地・時期は藤澤良祐の研究を参照した[8]。

中近世陶器　７点出土した。天目茶碗（１点）は火葬施設 ST２から出土した。広東茶碗（１点）は８号古墳周溝から出土した。産地・時期は藤澤良祐氏の研究を参照した[9]。

②石器・石製品

16 点出土した。石器・石製品は、縄文時代の石鏃、RF のほか、古墳に副葬された提砥、詳細時期不明の砥石、磨石、敲石、特殊磨石がある。

③金属製品

111 点出土した。古墳の石室及び埋納土坑から出土したものは副葬品と考えられ、耳環、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、刀子、刀装具がある。また、火葬施設からは鉄釘が出土した。鉄鏃の各部名称・分類細目については水野（2013）を参考にした[10]。なお、鏃身部長のほぼ２倍を超える頸部をもつものを長頸鏃、それ以下のものを短頸鏃と呼称する。鏃身部を欠くものや頸部が完存しないものについても、残存する頸部の長さや太さから、短頸鏃あるいは長頸鏃と判断したものがある。また、鏃身部の平面形態が三角形のもののうち、鏃身部の長さが幅の 1.5 倍以下を「三角形」、1.5 倍以上を「長三角形」と呼ぶ[11]。

④その他

炭化物・炭化材 45 点、骨 26 点、種子７点がある。炭化物・炭化材、骨については、遺構内から出土したものは、一括又は地区毎に取り上げた。種子は遺物包含層から出土した。

（２）遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、種別ごとに作成し、遺物番号順に記載した。共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置　グリッド及び遺構番号を記載した。複数の地区（グリッド）、遺構から出土した遺物が接合した場合は、全ての出土位置を表記した。遺構を四分割若しくはそれ以上に分割した場合は、北西隅の地区を１とし、時計回りに番号を振った。丸数字は遺構内の地区を表す。

出土層位　表土と遺物包含層及び造成土から出土した場合は基本層序名を表記した。所属層位が不明確なものは、複数の層序を併記した。また、遺構出土の場合は、埋土の深さ５cm ごとに人工分層し、その取上層位を上層から順に「ａ・ｂ・ｃ･･･」と表記し、土層観察畦から出土したものは、その土層番号（１・２・３･･･）を表記した。なお、複数の土層から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を表記した。

報告書掲載層位　遺物取上後に土層番号を変更したものについて、最終的な土層番号を表記した。

大きさ　（　）で示した大きさは、土器の場合は復元長、その他製品については残存値を示す。

口縁部残存率　Ｘ／12 のＸにあたる数値を記載した。12 分の１未満の破片は 12 分の１に切り上げ、12 分の１以上の破片は小数点以下第１位まで計測した[12)]。

底部個体数　２分の１以上残存している個体数を「１」とし、２分の１未満の個体は「０」とした。

胎土・色調　胎土中の含有物は肉眼観察で判断した。色調は『新版標準土色帖』（小山・竹原 2014）を参照した。

器面調整　摩滅等により不明な場合は、「摩滅」と記載した。

注

１）小鹿野亮 2003「古代道における路体施工の複合性」『九州考古学』第 78 号、九州考古学会

２）独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編 2013『発掘調査のてびき』各種遺跡調査編、文化庁文化財部記念物課監修、株式会社同成社

３）小幡早苗・近藤美紀 2001「横穴式石室用語の定義」『東海の後期古墳を考える』第８回東海考古学フォーラム三河大会、東海考古学フォーラム三河大会実行委員会

４）成瀬正勝 1999「美濃における横穴式石室の築造技法」『岐阜史学』第 96 号、岐阜史学会

５）内堀信雄・井川祥子 1996「美濃における古代煮炊具の様相」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会

井川祥子 2006「美濃中世後期土師器皿の分類と編年」『守護所と戦国城下町』、高志書院

６）各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』

齊藤孝正 1995「Ⅰ　東海西部（愛知・岐阜）」『須恵器集成図録』第３巻東日本編、雄山閣出版

田辺昭三 1982『須恵器大成』、角川書店

渡邉博人 1996「美濃の後期古墳出土須恵器の様相」『美濃の考古学』創刊号、美濃の考古学刊行会

７）前掲６）

８）藤澤良祐 2007「第１章　総論」『愛知県史』別編窯業２中世・近世　瀬戸系、愛知県史編さん委員会

９）前掲８）

10）水野敏典 2013「⑤鉄鏃」『副葬品の型式と編年』（古墳時代の考古学４）、株式会社同成社

11）三角形と長三角形の比率は、中森祐子（1999）を参考にした。

中森祐子 1999「第８章考察　第２項金属製品　鉄鏃」『船来山古墳群』、船来山古墳群発掘調査団　糸貫町教育委員会・本巣町教育委員会

12）宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 40 集、国立歴史民俗博物館